

ISSN 0918-9904

橋垣内遺跡 (A～C地区) 発掘調査報告

研究紀要第18-3号

2009 (平成21) 年3月

三重県埋蔵文化財センター

例 言

- 1 本書は、三重県教育委員会が、主要地方道津関線道路改良事業に伴い平成4年度に実施した津市大里窪田町に所在する橋垣内遺跡の埋蔵文化財発掘調査の結果を再整理したものである。
- 2 調査は下記の体制で行った。
調査主体 三重県教育委員会
調査担当 三重県埋蔵文化財センター
主 事 川戸達也
研修員 紀平みどり
- 3 報文執筆は川戸達也、紀平みどり、穂積裕昌、河北秀実が、写真撮影は川戸達也、紀平みどりが担当し、全体の編集は河北秀実が担当した。
- 4 木製品の樹種同定にあたっては、天理大学附属天理参考館（当時）の金原正明氏にお世話になった。記して謝意を表す。
- 5 地図及び遺構実測図は、国土調査法の日本測地系による第VI系座標を基準とし、挿図の方位は座標北を示している。なお、当遺跡周辺の磁北は平成6年現在で、座標北からN6°40'W振れている。
- 6 遺構埋土及び土層の土色、土質は肉眼観察による。
- 7 遺構表示略記号は下記のとおりである。
SB：掘立柱建物、 SE：井戸、 SD：溝、 SR：流路、 SK：土坑、 Pit：ピット、
SZ：性格不明遺構、 T：トレンチ、 G：グリッド
- 8 遺構番号は調査区単位で1から付与している。
- 9 遺物番号は通し番号である。
- 10 本書で報告した記録図面類、写真及び出土遺物は三重県埋蔵文化財センターで保管・管理をしている。

本文目次

例言

I	前言	(川戸達也)	1
	1	調査に至る経過	1
	2	調査の方法と経過	1
II	位置と環境	(紀平みどり)	3
	1	位置と地形	3
	2	歴史的環境	3
III	県道B地区(桜垣内地区)の調査	(穂積裕昌)	7
	1	遺構	7
	2	遺物	7
	3	まとめ	12
IV	県道C地区(橋垣内地区)の調査	(川戸達也・河北秀実)	26
	1	層序	26
	2	遺構	26
	3	遺物	34
	4	まとめ	38
V	県道A地区(丸垣内地区)の調査	(川戸達也・河北秀実)	43
	1	層序	43
	2	遺構	44
	3	遺物	44
VI	拡張区の調査	(川戸達也・河北秀実)	44
VII	採集遺物	(河北秀実)	45

1 前言

1 調査に至る経過

主要地方道津関線は、古くは、伊勢別街道として津東北部から亀山市関町鈴鹿峠付近を結ぶ重要な路線として人々の生活の中に生きてきた。近年、交通量が増加してきたため改良事業がすすめられてきたが、集落付近では用地の確保が困難であった。このような状況の中で、一般国道23号中勢バイパス(中勢道路)へのアクセス道路としての機能を兼ね備えた新路線の建設が計画されることになった。この道路は、三重県総合文化センターの落成に合わせて早期の建設が待たれている。なお、津市上津部町田他においては、都市計画道豊里久居線としてその整備事業の一部が完了している。

橋垣内遺跡は、中勢道路建設に伴う事前の分布調査によって六次B遺跡、大古曾遺跡の間を埋める形で存在が追加確認されたものである。平成元年度から同2年度にかけて約12,000㎡が中勢道路建設の事前調査として発掘調査されている。この調査の結果、東西に遺跡範囲の拡大が予想され、県道建設に際しては事前の発掘調査が必要であることが認識されていた。

当遺跡の範囲を確認するため、平成3年6月12日に試掘調査を実施したところ、遺跡は北西方面に広がりを持つことが確認され、字橋垣内ばかりでなく字丸垣内、字板垣内、字池の下にまで及ぶことが判明した。しかし、事業予定地内では、平成2年度団体営ほ場整備事業の際に未調査のまま掘乱されている部分があり、この部分に関してはトレンチによる遺構確認調査を、それ以外の部分については本調査を行うことが必要であると判断した。

当遺跡の取扱いについては、その保存に努めるように県土木部・津土木事務所との協議を重ねてきたが、この道路が地域振興と交通緩和のため必要であり、設計変更も困難なことからやむなく事前の発掘調査を実施することになった。その結果、事業予定地約15,800㎡の内本調査必要区域は計10,600㎡、トレンチ調査必要区域は計5,200㎡となった。

今年度は、本調査計4,000㎡、トレンチ調査5,200㎡を実施し、残り6,600㎡は次年度以降改めて調査する

こととなった。

また、当遺跡に隣接する大古曾遺跡は南東の一身田町大字大古曾字宮繩手にもその広がりが見込まれてきたために、事業予定地内約2,600㎡において平成4年10月5日に大古曾遺跡の試掘調査を実施した。結果は、予想に反して遺構・遺物と共に確認されなかった。従って、中勢道路交差点以南の地区については工事に支障がないと判断し、直ちに着工されることになった。

2 調査の方法と経過

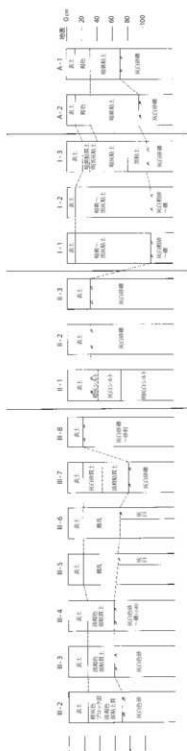
発掘調査は県土木部の執行委任を受けて、平成4年8月17日から開始し、平成5年1月29日に現地での調査を完了した。

今年度の調査区は、総延長約500mにおよび本調査とトレンチ調査区が交互に並んでいる。本調査区を北から順に丸垣内地区をA地区600㎡、板垣内地区をB地区1,000㎡、橋垣内地区をC地区2,400㎡とし、それぞれ4m×4mグリッドを基本単位として調査を進めた。トレンチ調査区についてはA-B間とB-C間に別れているが、ここに2m×10～15mのトレンチを20m間隔で道路中心線に直交するように設定し、必要に応じて拡張した。

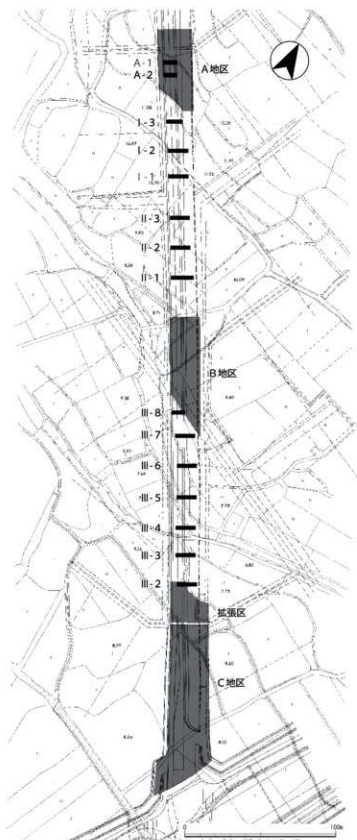
発掘作業は、表土をバックホーで除去することから始めたが、既に表土が無くになっている所や、逆にほ場整備の際の排土が堆積している所があったりして、遺構面に影響を与えないように表土を除去することの難しさを改めて感じさせられた。

また、排土はトレンチ調査が終了した地区へ捨てることを原則としたが、C地区では隣接したほ場ヘダンプカーによって搬出した。その後、人力によって遺物包含層掘削及び遺構検出を行った。

遺構検出及び遺構掘削の終了した調査区においては必要に応じて遺構別実測を行った後、地区毎に測量を実施した。A・B地区では平板測量を行い、各地区の基準点に中勢道路センター杭から放射トラスによって座標を移動した。C地区では、航空写真測量を行った。また、測量時に絶対高の基準となるベンチマークは一身田大古曾の路肩にあるNo.19の2級基準点を採用した。



第1図 トレンチ調査区土層柱状図



第2図 調査区位置図(1:2,500)

調査日誌 (抄)

8月17日	現地にて調査開始 トレンチ調査区掘削
8月18日	トレンチ調査続行 台風のため午後中止
8月19日	台風のため中止
8月20日	B地区表土除去 遺構検出開始
8月25日	レベル移動
9月7日	B地区旧河道S R2検出
9月16日	B地区旧河道S R2掘削開始
9月21日	A地区表土除去
9月29日	降雨のためB地区水没
10月5日	大古曾遺跡試掘調査
10月8日	トレンチ調査拡張区掘削 C地区表土除去
10月20日	A地区遺構検出開始 B地区旧河道S R2遺物出土状況実測
10月26日	A地区掘削終了
10月30日	C地区表土除去再開
11月12日	B地区掘削完了
11月16日	C地区遺構検出開始
11月17日	B地区写真撮影・遺構実測
11月18日	A地区写真撮影・遺構実測
12月7日	降雨のため東端から1/3冠水
12月8日	やむなく西端から検出再開開始
12月10日	井戸S E 9検出
12月16日	井戸S E 8検出
12月27日	C地区土層断面図実測
1月6日	作業再開
1月7日	井戸S E 8半載実測
1月11日	A・B地区座標振り込み
1月12日	航空測量のための現地説明会
1月18日	航空測量業者入札
1月26日	C地区写真撮影・遺構実測
1月27日	航空測量
1月29日	現地での調査終了
1月30日	現地説明会

(川戸 達也)

II 位置と環境

1 位置と地形

三重県の北中部に広がる伊勢平野、そのほぼ中央部に位置する津市は、東に伊勢湾を望み、半田丘陵・長谷山・長岡丘陵に三方を囲まれ、安濃川・志登茂川・岩田川によってできた沖積平野上にある。

橋垣内遺跡(1)の所在する津市大里窪田町は、津市の北西部にある丘陵地の裾野に位置し、現在町の中央を東西に伊勢別街道が縦走り、集落は街道に沿って連なっている。町の北側を流れる志登茂川は、その源を芸濃町の丘陵地に発し、蛇行を繰り返しながら高尾野・大里地区の洪積台地を開析し、大里窪田町を境に川幅を徐々に広げ、一身田・上浜町を抜け津市の北西から南東方向に流れ沖積平野を形成している。河口は津市の中央部を流れる安濃川に接して伊勢湾に開口する。志登茂川の北には標高30～90m前後の河芸丘陵が南東方向に連なり、南には標高30m前後の比較的低い丘陵が伸びている。両丘陵とも第三紀奄芸層群からなり、その間には洪積台地が舌状に伸びて大里窪田町の東端付近で約10mの段差を成して沖積平野へ移行する。

橋垣内遺跡は、志登茂川の支流である毛無川の中流域標高8～15mの下位段丘から低地の間に広がる小扇状地に位置する。毛無川は、津市大里窪田町西部の丘陵を源とし、大里窪田町の水田地帯を潤しながら北東に下り、一身田の集落を通り上浜町にかかる手前で志登茂川に合流している。しかし、その一方で下流の沖積平野は標高1～2mの低湿地となっており、近年まで海岸から2km内外までは、所々に湿地が残る状況が見られていた。そのため、沖積低地部の中央にある一身田の集落は、志登茂川や毛無川の氾濫による影響を強く受けている。

2 歴史的環境

志登茂川流域を中心に周辺の調査された遺跡を主として時代順に述べてみたい⁽¹⁾。

現在のところ旧石器時代の明確な遺跡は津市及びその周辺では確認されていないが、平成4年度の調査で津市大里窪田町東浦遺跡(2)から旧石器時代から縄文時代草創期と見られる木葉形尖頭器が発見さ

れた。遺構については不明であるがこの時代の遺物としては、津市内では初めての出土となる。その他に安濃町平田古墳群⁽³⁾でも旧石器時代に遡る可能性が考えられる石器が3点報告されている。

縄文時代になると遺物の散布はあるが明確な遺構の検出されている例は少ない。橋垣内遺跡からは早期の押型文土器が、また旧河道の河底近くからは晩期の土器が出土している。東浦遺跡では少量だが早期から中期頃の土器片が土坑から出土している。大里西沖遺跡⁽⁴⁾からは、縄文時代中期末とみられる竪穴住居1棟、土坑4基が検出された。その他縄文後期の土器片が遺構を伴わず踏合遺跡⁽⁵⁾、川北遺跡⁽⁶⁾から出土している。安濃川中流域では、中期末葉の土器が土坑や集石遺構を伴って出土した宮ノ前遺跡⁽⁷⁾や晩期の竪穴住居が検出された松ノ木遺跡⁽⁸⁾等がある。その他、納所遺跡⁽⁹⁾、辻の内遺跡⁽¹⁰⁾、多倉田遺跡⁽¹¹⁾で晩期の土器

が出土している。

弥生時代になると、安濃川流域に伊勢平野で最大の弥生時代集落遺跡である納所遺跡が現れる。納所遺跡は弥生時代前期・中期と古墳時代以降の複合遺跡でこの地域の拠点集落であろうと考えられている。志登茂川流域では、弥生時代中期のものとして、川北遺跡で土器片が見つかった。また、橋垣内遺跡では、方形周溝墓と土坑墓が検出されている。住居としては、見当山丘陵部の長遺跡⁽¹²⁾で200棟近い竪穴住居が、山籠遺跡⁽¹³⁾では10棟の中期後葉の竪穴住居が検出されている。後期については、水田跡が検出された森山東遺跡⁽¹⁴⁾が挙げられる。また、多量の土器がV字溝や竪穴住居から出土した東豊野遺跡⁽¹⁵⁾、隅丸方形プランの竪穴住居が1棟確認されている中産遺跡⁽¹⁶⁾などがあり、この時期は遺跡数が一段と増加している。

古墳時代の遺跡は、古式土師器を伴う竪穴住居3



第3図 遺跡位置図(1:50,000)

棟が検出された中齋遺跡、前期の大集落として竪穴住居70棟以上と方形周溝墓7基が検出された川北遺跡がある。橋垣内遺跡では、竪穴住居7棟が、東浦遺跡で前期の竪穴住居数棟が確認されている。また六大A遺跡⁽¹⁷⁾では古墳時代の大溝から多量の木製品と祭祀遺物が出土している。志登茂川流域に現在約100基以上の古墳が報告され、大多数は径10m程の円墳で後期の築造と考えられている。登茂川左岸の丘陵部や段丘上に数基単位の古墳群が比較的多く分布するのに対し右岸の丘陵部は数少なく点々と分布する傾向が認められる。そのうち発掘調査されたものは、木棺直葬の主体部に鉄鎌1本のみが出土した墓の谷1号墳⁽¹⁸⁾がある。その南に2号墳⁽¹⁹⁾、東に3号墳⁽²⁰⁾があり、いずれも径10m前後の小型の円墳で、2号墳からは円筒埴輪片が出土している。また、3号墳の東南に菅ヶ谷2号墳⁽²¹⁾、東に1号墳⁽²²⁾がある。2号墳は、すでに破壊されているが大きな石があり横穴式石室が破壊されたものらしい。西岡古墳⁽²³⁾では、墳丘北東側の溝から鉄製農工(耕)具と埴肩部から鉄剣が出土した。一方、安濃川流域では、志登茂川流域に比べ、明合古墳⁽²⁴⁾や長谷山古墳群のような大規模古墳や大群集墳が見られる。

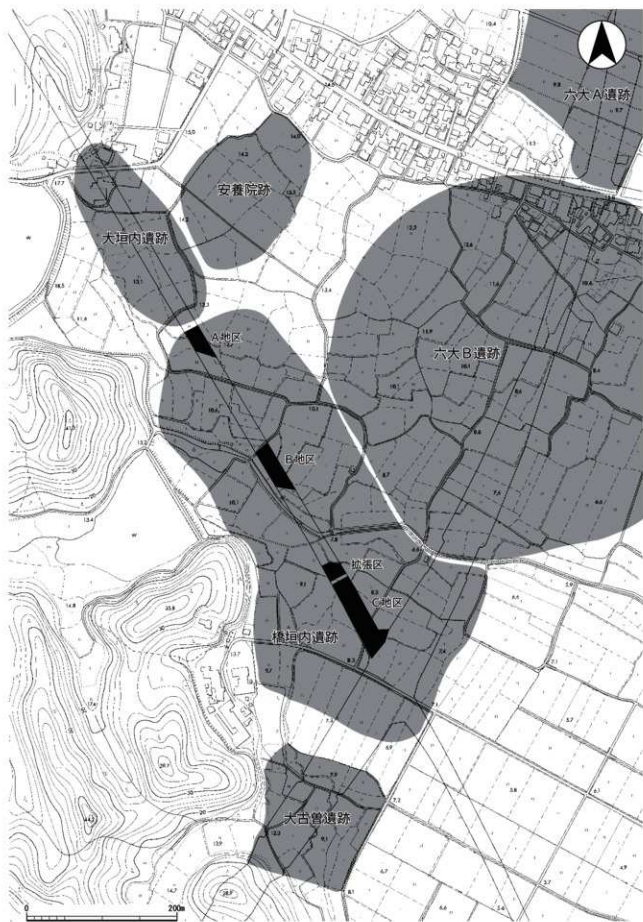
律令時代に入ると窪田の地名は、平城宮出土の木簡に『伊世国庵伎郡 久苾多里私部小□□』と書かれており8世紀の初め頃には律令政府の国家体制の中で一つの行政単位として確立されていたことがうかがえる。平安時代の「和名抄」⁽²⁵⁾に記される窪田郷は当地域を中心とした郷と推定される。このころの遺跡としては、緑軸陶器や円面硯、多数の掘立柱建物が見つかった安養院跡⁽²⁵⁾、飛鳥・奈良から平安時代の掘立柱建物⁽²⁶⁾が中心で緑軸陶器や石帯が出土した六大B遺跡⁽²⁶⁾がある。この辺りは、古代庵伎郡の官衙、具体的には庵伎郡の郡衙であった可能性が高いとされる。また、安養院跡、六大B遺跡共に軒丸・軒平瓦が出土している点も興味深い。他には飛鳥から奈良時代にかけての掘立柱建物⁽²⁷⁾が検出された大古曾遺跡⁽²⁷⁾、橋垣内遺跡、奈良時代の掘立柱建物⁽²⁸⁾が検出された大垣内遺跡⁽²⁸⁾がある。

中世になると窪田郷に、窪田荘が成立し、「神風鈔」⁽²⁹⁾に見られるように、承久年間に伊勢神宮に寄進

され「窪田御厨」となったものとみられるが、14世紀になると、再び摂関家領窪田荘の名が現れることから、その支配権は転々としたものと考えられる。建武元年伊勢国守護北条氏の没落により窪田荘は再び伊勢神宮に寄進されたがそれ以降地頭職の史料は見えなくなり、在地の武士によって押領されたものと推定される。一方領家職は幕府より京都熊野若王子神社に寄進され、室町時代を通じて若王子神社の知行が安堵されていたが、太閤検地によって否定され、近世には津藩領となる。大古曾遺跡、六大A遺跡、六大B遺跡では、中世の遺構・遺物も見つかっている。付近の主な中世城館としては、鎌倉時代から室町時代にかけての城館である川北城⁽³⁰⁾、大規模な空堀を持つ峯治城⁽³¹⁾、掘立柱建物や柵列の見つかった上津部田城⁽³²⁾等がある。

そして、所謂参宮道が室町時代以降に安濃川ルートから志登茂川ルートに変わっていく中で窪田は、近世に入り伊勢参宮の流行につれて宿場町として新たな繁栄を迎える。宿の東端には近江商人が奉獻した常夜灯があり江戸時代半ばには庄屋である国府家を本陣とし、他に本陣代を務めた花屋等、屋号を持つ家が多数並んでいた。また、六大B遺跡A地区では発掘調査により近世の遺構・遺物が確認されている。

(紀平みどり)



第4図 遺跡地形図(1:5,000)

III 県道B地区(桜垣内地区)の調査

B地区は、橋垣内遺跡県道調査区の中央部、現在の毛無川河道のすぐ東側に位置する。縄文時代と古墳時代に属する河道が確認され、特に古墳時代の河道からは大量の土器・木製品が出土した。

1 遺構

旧河道S R 1 幅5.8～8.2 m、深さ約1.2 mの南北河道である。南側は河道肩部から緩やかに落ち込むが、北側は幅狭で落ち込みが急である。地形から南流していたとみられるが、底面高は北端・南端とも標高8.2 mとほぼ等しい。埋土層から僅かながら縄文中期後葉の土器片が出土した。

旧河道S R 2 調査区の中央を横断する幅5.5 m～6 m、深さ1.2 mの東西河道である。地形から東流していたとみられる。弥生時代後期から古墳時代後期までの土器（主体は古墳時代中期～後期初頭）と大量の木器・自然木が出土した。土層をみると、当初、自然の流路があったが（Ⅵ層）、その流路がある程度埋没した後に大きく2回の掘削が加えられた。最初の掘削が弥生後期～古墳初頭で、その後、遺物取り上げの「Ⅴ層」・「最下層」が堆積し、さらに古墳中期に再掘削（その後の堆積が遺物「Ⅳ層」）された。Ⅳ層（この場合、Ⅳ1層）とⅤ層の間には北岸側にラミナ状の堆積層（Ⅳ2～Ⅳ6層）がみられる。ただし、Ⅳ1層にも古墳前期の土器が大量に混じっており、上位層の下位層への侵食等によって層の安定性は低かったと判断される。

遺物のほとんどはⅣ層からの出土で、Ⅳ層中で3面の出土状況図が作成されている。遺物の出土状況は雑然とし、何らかの意味を見出しづらい部分が多い。しかし、Ⅳ層第1面（上部）で、内部にモモ核の入った須恵器甕（133）と特殊な甕（75）・土師器高杯（38）・鏝とみられる木製形代（211・212）が集中して出土した部分がある。いずれも、祭祀に供されることのある遺物群であり、何らかの祭祀行為に用いたものを一括して投棄した可能性があるろう。

なお、このⅣ層の時期に、流路脇に付設施設であるS Z 3が造られているが、性格等は不明である。

2 遺物

橋垣内遺跡県道B地区出土の遺物は、古墳時代中期を中心とした旧河道S R 2出土遺物が大半を占め、そこに縄文時代の河道である旧河道S R 1出土の縄文土器がごく微量伴う。旧河道S R 2には、土器だけでなく大量の木製品も伴っている。以下、特徴的なものを中心に簡単に解説しておく。

a 旧河道S R 1出土遺物（1～2）

いずれも縄文晩期の突帯文土器で、口縁部の残る1の突帯は素文である。

b 旧河道S R 2出土遺物

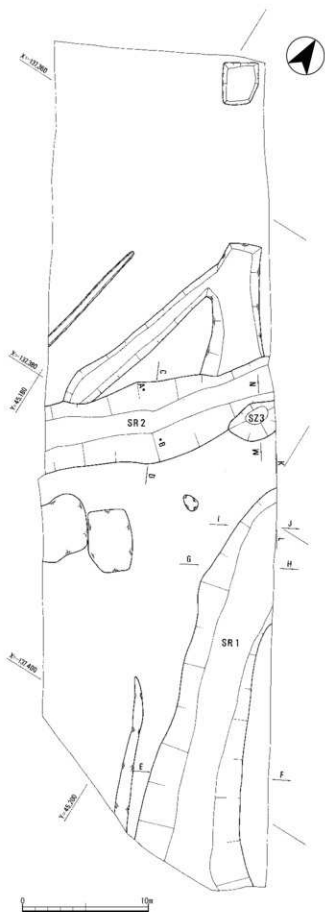
土器は現場で把握された層序別の取り上げに従って配列したが、結果として必ずしもそれが正確に時期差を反映しているとは言いがたく、新古の土器が同一層で混在するなどかなり混乱した状況が見受けられる。なお、木製品は、後述する。

最下層（Ⅴ層）出土土器（3～7） 壺（3～5）・受口鉢（6）・小型器台（7）がある。3～6は弥生後期、7は古墳時代前期に属する土師器である。

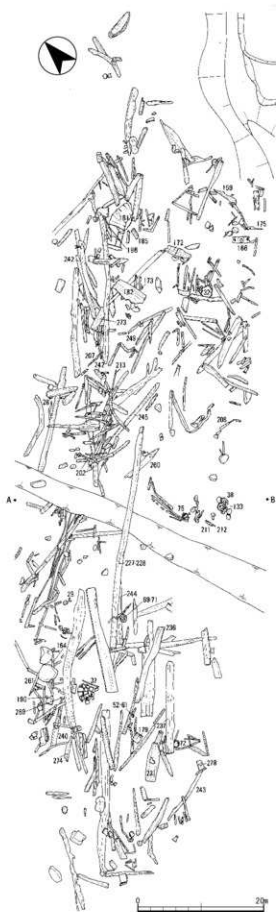
Ⅳ層内S Z 3出土遺物（8・138） ガラス玉（8）と土師器高杯（138）がある。ガラス玉は縦長で、胴部が膨らむ形状を呈する。色調は黄色である。

Ⅳ層出土土器・土製品（9～76・133） 弥生後期土器では広口壺（9～16）・長頸壺（17）・二重口縁壺（19）・形式不明壺（18・20）・直口土（47）、器台（21～22）、高杯（23～26）、受口甕（27）・口縁形式不明台付甕（28）、土師器ではく字形甕（29～33）・S字甕（34～37）、高杯（38～42）・小型丸底壺・鉢（43～45）、小形壺（46）、ミニチュア壺（48）、手捏ね土器（49～63）、杯（64～67）、甕（68）、須恵器の杯蓋（69）・杯身（70～73）・甕（74・133）・小形甕（75）・土師質の土玉（76）を図示した。弥生時代後期に属するものから、古墳時代後期初頭に属するものまでを含む。このうち、須恵器小形甕（75）は、全体をタタキ成形した丸底の甕で、口縁部に外斜面をもつ。形態的に珍しい。

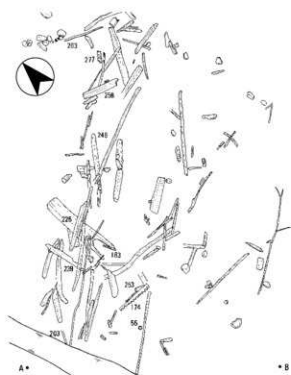
Ⅲ層出土土器・石製品（77～97） 土師器高杯（77～78）、受口甕（79）・く字形甕（古墳前期；81・後期；92・古代；94～95）・S字甕脚台部（82～86）・口縁形式不明台付甕（80）、須恵器の杯蓋（87）・杯身（88～91）・壺（93）、それに軽石（96～97）



第5图 B地区遺構平面図(1:300)

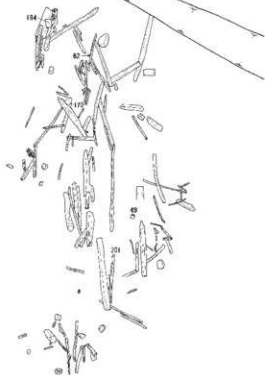


第6图 SR2 IV層第1面出土状況(1:60)

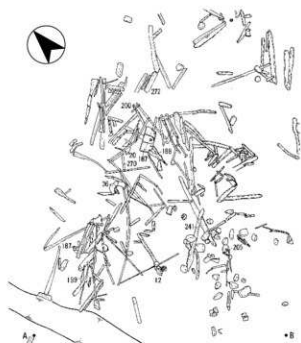


A*

B

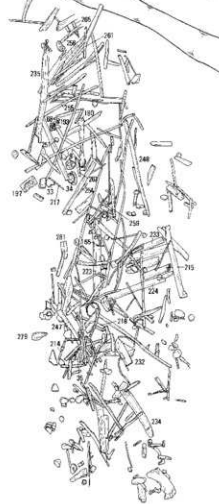


第7图 SR2 IV层第2面出土状况图(1:60)

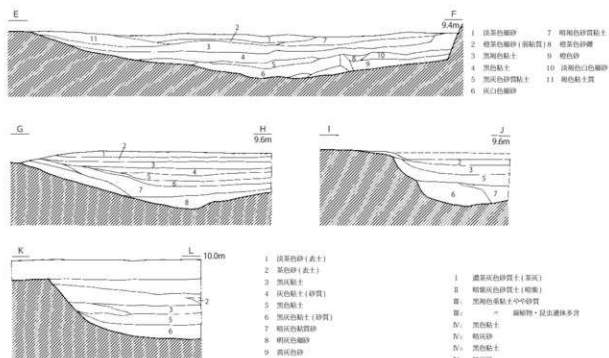


A*

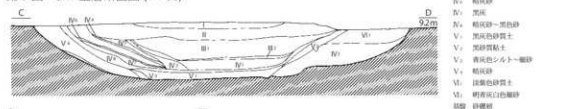
B



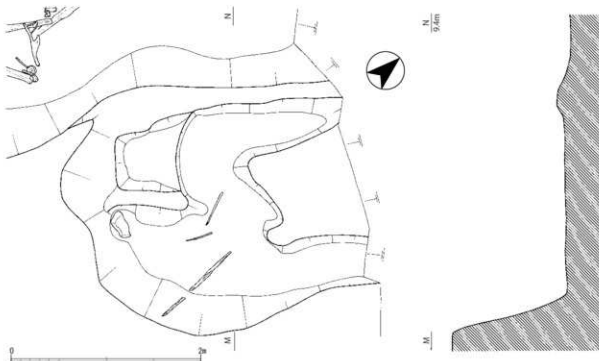
第8图 SR2 IV层第3面出土状况图(1:60)



第9圖 SR1 土層断面図(1:80)



第10圖 SR2 土層断面図(1:80)



第11圖 SZ3 実測図(1:40)

がある。遺物の時期幅が広く、層として一括性の安定性は低い。

Ⅱ層出土土器 (98～121) 弥生土器の甕 (98) と高杯 (99)、土師器の高杯 (100・103～104)・有頸鉢 (101)・S字甕 (102)・粗製小形丸底壺 (105)、須恵器の高杯蓋 (106)・高杯 (107)・杯蓋 (108～110)・杯身 (111～115)・壺 (116～117)・甕 (118～120)・俵瓶 (121) がある。

Ⅲ層出土遺物 (122～125) 須恵器短頸壺 (122)・杯身 (123)・大甕 (124)・有頸鉢 (125) を図示した。いずれも古墳後期以降に属しよう。

層不明遺物 (126～132・134～137) 弥生土器～土師器の壺 (126～128)、土師器のヒサゴ壺 (129)・高杯 (130～131)・丸底壺 (132)、須恵器の有蓋高杯蓋 (134)・杯身 (135～136)、土錘 (土師質、137) を図示した。128の胴上部には、鋸歯状の記号文がみられる。

石鏃・石製品 (138～146) 出土層序に関係なく、石鏃と石製品を一括した。138はサマサイト製の石鏃である。側縁が鋸歯状に調整されており、弥生時代の所産であろう。139は管玉、140は滑石製勾玉、141～146は滑石製白玉である。滑石製白玉のうち、141は中央部が菱形に膨らんで稜線をもつ。

包含層出土遺物 (147～163) 縄文土器 (147～148)、弥生土器壺 (149)、土師器高杯 (150～151)・S字甕 (152)、甕 (160)・須恵器杯蓋 (153～154)・156～157)・杯身 (155)・158～159)・砥石 (161)・軒平瓦 (162～163) を図示した。縄文土器は、隆帯による口縁部窓枠区画をもち、中期に属する。軒平瓦は、いずれも二重の弧文をもち、剥落痕・接合痕から板状にした2枚の粘土を貼り合わせて1枚の瓦としていることが観察される。

c 旧河道SR2出土木製品

レイアウトの都合上、器種毎に配列した。171・177・188・189・198・222がⅢ層、238が所属層序不明である以外、残りはすべてⅣ層からの出土である。

道具柄 (164～165) 164は板状鉄斧柄、165は袋状鉄斧柄である。

鎌身 (166～171) 166～167は直柄広鎌、168～169・171はナスビ形曲柄又鎌、170はナスビ

形曲柄平鎌である。

組み合わせ鎌身 (172～173) 172は、鉄刃を装着するため、先端がU字形に加工されている。

エブリ (174) 柄孔の部分は欠損するが、鋸歯状の歯を作出しており、エブリであろう。

方形棒付田下駄 (175～176) 欠損部も大きい、いわゆる大足の破片と思われる。ただし、176はたんに有頭材とすべきかもしれない。

鎌柄 (177) 端部に刃を挿入するためのスリットと釘孔があり、鎌柄と考えた。

打ち鎌 (178) 両側縁が括れた扁平な身に柄が作り出されたものである。これまで鋸末製品などとされることが多かったが、豆打ちなどの打ち鎌とされることが多い。

横槌 (179) 柄の先端をグリップ状に削り出したもので、六大A遺跡の横槌分類のC類にあたる。

竪杵 (180) 搦部と握部の境界がいまひとつ不明でないが、搦部自体は円柱状の断面をもつ。

臼 (181) 非常に残りは悪いが、臼が半壊したものであろう。

案 (182～185) 182と183は天台、184と185は脚である。182は下面に手斧痕を残し、脚との接合仕口もないことから未製品であろう。

把手付割物容器 (186～187) いわゆるアカ取りとされる容器に似るが側縁等は欠損する。

曲物 (188～189) 楕円形曲物の底板である。底板周縁をL字状に切り落とし、皮紐紐じ用の円孔を穿ったもの。側板内側に1孔を開ける188(六大A遺跡曲物底板分類のE類)と、側板の両側を開ける189(六大A遺跡曲物底板分類のD類)がある。

紡織具 (190～198) 紡錘車 (190～191)、木鐘 (192～194)、編台目盛り板 (195)、棒 (196)、タタリ (197～198) がある。紡錘車のうち、192は未穿孔で、未製品と思われる。タタリはいずれも台部で方形と円形がある。

機織具 (199～201) 必ずしも部位は明らかでないが、一応その可能性のあるものとして掲げた。あえて部位を考えてみれば、199は経送り具、200は緯打ち具、201は糸巻具の可能性がある。

刀鞘 (202) 鶏卵形の断面形状を有することから刀の鞘とみられる。

武器形 (203～213) 203～207は刀形、208～213は鍔形とみられる。ともに六大A遺跡に同形状の類例がある。

儀仗 (214) 甍形部から簪飾り状の二股を作り出したものだが、二股先端は欠損している。全体に黒漆が塗られている。甍上昇氏の儀仗分類のX類に相当し、5世紀後半のものと思われる。

男茎形 (215) 男茎状に端部を切り落として溝を彫ったものである。

儀具? (216～222) 丁寧な調整を加えることや、刀剣類などとの形態的類似性などから、形代など儀具の可能性を考えたが、別のものかもしれない。このうち221と222は板材系で、222には線刻がある。

建築部材 (223～248) 壁等の板材 (223～226)、横架材 (227～230)、蹴放し (231)、柱材 (232～238)、垂木・下地材等 (239～248) を図示した。このうち229は方形孔が斜めに穿たれており、屋根関係部材の可能性があろう。

その他 (249～283) 有頭棒 (249) も含め、用途がいまひとつ特定できないものを一括したが、257～259は柄、260～265などは杭であろう。

d 植物遺体

図示しなかったがS R 2からはヒョウタンが出土しており、少なくとも3個体分のまとまりが見られた。また、S R 2とS Z 3からは約200個のモモの核が出土した。すべてダイビアナ種である。いずれも、祭祀に用いられると考えられる植物であり、祭祀具の出土と合わせて注目したい。

3 まとめ

県道B地区は、調査区内で縄文時代の旧河道S R 1と弥生後期～古墳時代の旧河道S R 2という河道が確認されたにとどまらず、S R 2では木製品を含む豊富な遺物が出土した。ここでは、中勢道路調査で確認された河道との関連と、出土遺物について簡単に触れて、まとめとしたい。

a 旧河道の性格

県道B地区で確認された2本の河道は、基本的に西側の丘陵から流れ出た水を下流部へ排出する役割を担った河道と思われる。現在は毛無川として1本の流路に集約された状況にある。そういう意味では、旧河

道S R 1と旧河道S R 2は、ともに毛無川の旧流路の一部であったと思われる。

その場合、県道B地区の300mほど南東側に位置する中勢道路調査区でも縄文時代の旧河道(中勢道路調査区S R 1)と弥生時代後期～古墳時代後期の旧河道(S R 3)がある。このうち、中勢道路S R 1は縄文時代晩期の突帯文土器が出土していて、県道S R 1(本調査区の旧河道S R 1)の出土遺物とは時期が異なるが、浅くて幅広い流路形状は共通しており、遺構の特徴は共通性がある。同様に、県道S R 2と中勢道路S R 3は出土遺物の時期幅や埋土の状況に共通性が大きく、両者は同一溝の上流(県道)と下流(中勢道路)に相当する可能性が高い。

S R 2は、出土遺物も豊富であったが、より上位の層序から本来下層に存在していたであろう遺物も出土するなど層としての安定性に欠けるが、IV層では祭祀に供されたと推定される土器・木製形代群が狭い範囲から集中して出土するなど旧河道ないしはその周辺部で何らかの祭祀行為が行われたことを示唆している。

b S R 2出土木製品について

出土木製品は、曲物底板(188～189)などごく一部がIII層に属する以外、ほぼ全てがIV層からの出土である。IV層は、前後の時期の混入もあるものの、多くの土器が5世紀から6世紀初頭に収まり、ナズビ形曲柄鎌(168～170)の型式学的特徴もこれと矛盾しない。従って、IV層(IV 1層)の所属時期は概ね古墳時代中期から後期初頭に相当しよう。

器種組成は、農具(耕起具・収穫具)、容器・紡績紡織具、案・祭祀具・建築部材など一通り揃っているが、器種判明木器の中で祭祀具の占める比率が相対的に高い。また、案(182)と木製紡錘車(191)の未製品がみられる以外、鎌類も含めて製品のみで構成されることも特徴としてあげられよう。

特殊な遺物としては、いわゆる儀仗形木製品がある。これらが出土する遺構は、首長埋葬の遺跡が多いとの指摘があるが、橋内内遺跡をのみ限り農具や陶物など一般層との関わりが想定できるものが多い。ただし、武器形は、刀形や鍔形など六大A遺跡のものも共通する部分が多い。総じて橋内内遺跡の木製品は、古墳時代中期における当地域における基本的な木器組成を示す遺跡として、今後の基準となる遺跡のひとつであろう。(穂積啓三)

遺物番号	実測番号	出土遺構層序	器種	残存度	備考
1	074-05	SR1	縄文土器	小片	突華文
2	074-03	SR1	縄文土器	小片	突華文
3	053-02	SR2・墓下層 (V層)	弥生土器	口縁1/2	
4	052-05	SR2・墓下層 (V層)	弥生土器	口縁1/4	
5	067-01	SR2・墓下層 (V層)	弥生土器	胴上部片	
6	053-04	SR2・墓下層 (V層)	弥生土器	体部1/6	
7	010-05	SR2・墓下層 (V層)	弥生土器	受口鉢	
8	059-02	SR2・IV層内S2	弥生土器	小尖蓋	口縁片
9	038-01	SR2・IV層	弥生土器	口縁片	
10	041-02	SR2・IV層	弥生土器	口縁3/8	
11	039-01	SR2・IV層	弥生土器	体部3/4	口縁縁片
12	035-02	SR2・IV層	弥生土器	口縁2/3	
13	038-03	SR2・IV層	弥生土器	胴部	
14	054-02	SR2・IV層	弥生土器	胴上部片	
15	051-03	SR2・IV層	弥生土器	胴上部片	
16	051-02	SR2・IV層	弥生土器	胴上部片	
17	066-03	SR2・IV層	弥生土器	口縁1/3	体上部
18	060-03	SR2・IV層	弥生土器	形式不明	体部片
19	046-03	SR2・IV層	弥生土器	口縁1/4	
20	054-01	SR2・IV層	弥生土器	口縁1/8	体部
21	046-01	SR2・IV層	弥生土器	口縁1/6	唇部
22	053-03	SR2・IV層	弥生土器	口縁1/6	
23	055-03	SR2・IV層	弥生土器	胴上部	
24	055-02	SR2・IV層	弥生土器	唇部片	
25	066-01	SR2・IV層	弥生土器	口縁1/8	
26	055-01	SR2・IV層	弥生土器	口縁片	
27	046-02	SR2・IV層	弥生土器	口縁1/8	
28	034-01	SR2・IV層	弥生土器	台付蓋	
29	040-01	SR2・IV層	土師器	口縁3/4	体部3/4
30	042-01	SR2・IV層	土師器	口縁1/4	
31	037-01	SR2・IV層	土師器	口縁2/3	
32	050-01	SR2・IV層	土師器	口縁3/4	体部1/4
33	075-01	SR2・IV層	土師器	口縁縁片	体部
34	036-01	SR2・IV層	土師器	口縁片	体部
35	034-02	SR2・IV層	土師器	口縁1/2	
36	035-01	SR2・IV層	土師器	口縁3/5	
37	047-01	SR2・IV層	土師器	口縁2/3	体部9/10
38	066-04	SR2・IV層	土師器	胴2/3	
39	043-05	SR2・IV層	土師器	胴片	
40	044-03	SR2・IV層	土師器	胴1/10	
41	046-04	SR2・IV層	土師器	胴1/2	

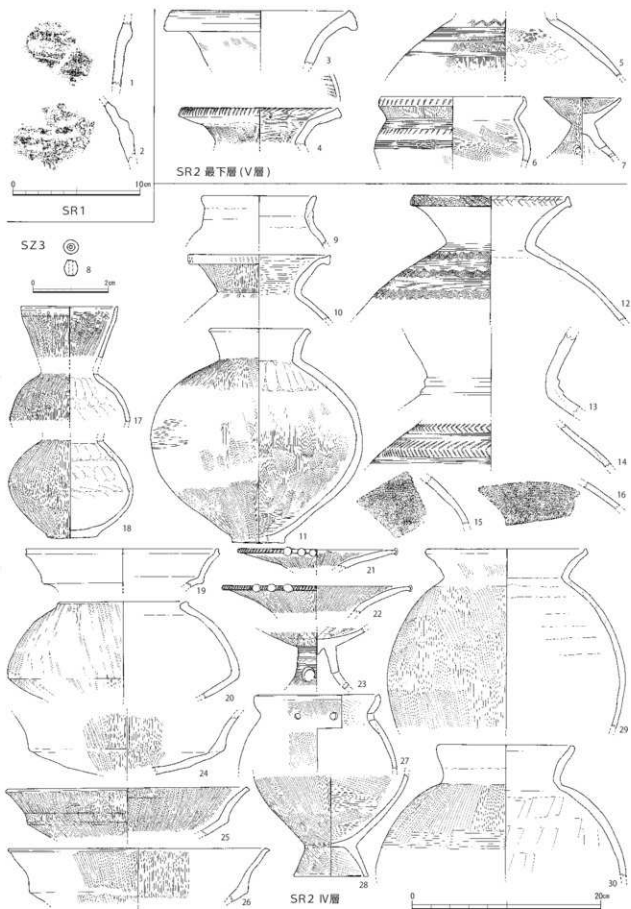
遺物番号	実測番号	出土遺構層序	器種	残存度	備考
42	048-03	SR2・IV層	土師器	胴1/4	
43	038-02	SR2・IV層	土師器	口縁2/3	体部4/5
44	048-01	SR2・IV層	土師器	口縁片	体部
45	044-01	SR2・IV層	土師器	口縁片	体部
46	045-02	SR2・IV層	土師器	口縁片	体部
47	041-03	SR2・IV層	土師器	口縁片	体部
48	044-02	SR2・IV層	土師器	口縁片	体部
49	048-02	SR2・IV層	土師器	口縁片	体部
50	057-04	SR2・IV層	土師器	口縁片	体部
51	049-01	SR2・IV層	土師器	口縁片	体部
52	067-06	SR2・IV層	土師器	口縁片	体部
53	049-02	SR2・IV層	土師器	口縁片	体部
54	052-04	SR2・IV層	土師器	口縁片	体部
55	041-01	SR2・IV層	土師器	口縁片	体部
56	067-03	SR2・IV層	土師器	口縁片	体部
57	067-04	SR2・IV層	土師器	口縁片	体部
58	052-03	SR2・IV層	土師器	口縁片	体部
59	052-02	SR2・IV層	土師器	口縁片	体部
60	035-03	SR2・IV層	土師器	口縁片	体部
61	067-05	SR2・IV層	土師器	口縁片	体部
62	049-03	SR2・IV層	土師器	口縁片	体部
63	057-05	SR2・IV層	土師器	口縁片	体部
64	052-01	SR2・IV層	土師器	口縁片	体部
65	043-04	SR2・IV層	土師器	口縁片	体部
66	028-05	SR2・IV層	土師器	口縁片	体部
67	034-03	SR2・IV層	土師器	口縁片	体部
68	061-01	SR2・IV層	土師器	口縁片	体部
69	043-03	SR2・IV層	土師器	口縁片	体部
70	049-04	SR2・IV層	土師器	口縁片	体部
71	043-02	SR2・IV層	土師器	口縁片	体部
72	043-01	SR2・IV層	土師器	口縁片	体部
73	033-03	SR2・IV層	土師器	口縁片	体部
74	045-01	SR2・IV層	土師器	口縁片	体部
75	057-01	SR2・IV層	土師器	口縁片	体部
76	059-04	SR2・IV層	土師器	口縁片	体部
77	030-04	SR2・III層	土師器	口縁片	体部
78	033-02	SR2・III層	土師器	口縁片	体部
79	060-01	SR2・III層	土師器	口縁片	体部
80	067-02	SR2・III層	土師器	口縁片	体部

表1 - (1) 遺物一覧表

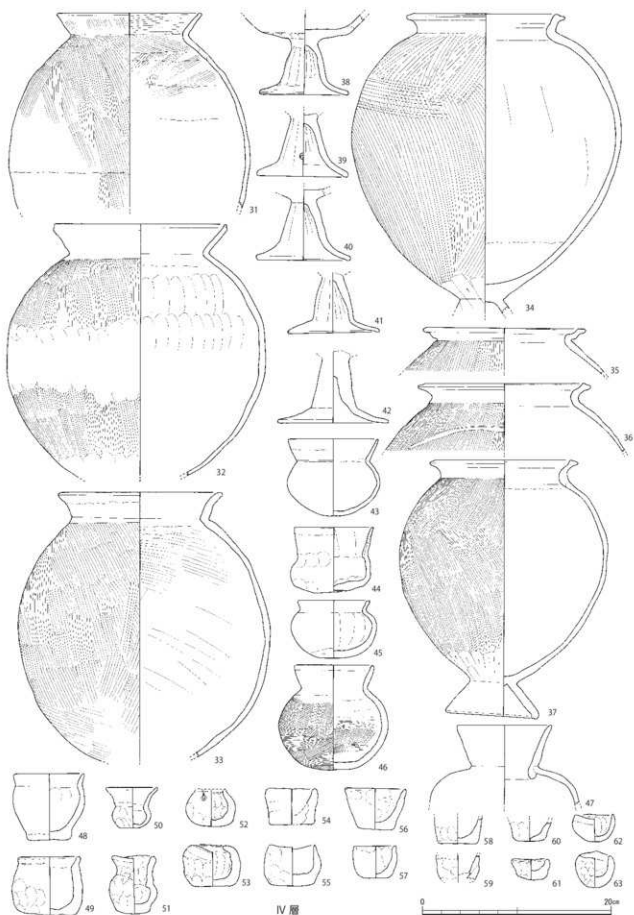
遺物番号	実測番号	出土遺構層序	器種	残存度	備考
81	032-05	SR2・II層	土師器 く字形甕	□線1/4	
82	032-04	SR2・II層	土師器 5字甕	□線1/9	
83	031-01	SR2・II層	土師器 5字甕	□線3/8	
84	030-03	SR2・II層	土師器 5字甕	台片	
85	030-01	SR2・II層	土師器 5字甕	台完存	
86	030-02	SR2・II層	土師器 5字甕	台片	
87	032-01	SR2・II層	須恵器 杯蓋	7/10	
88	028-04	SR2・II層	須恵器 杯身	□線1/5	
89	028-01	SR2・II層	須恵器 杯身	□線3/4	
90	028-02	SR2・II層	須恵器 杯身	□線1/2	
91	028-03	SR2・II層	須恵器 杯身	□線小片 体部	
92	032-02	SR2・II層	土師器 く字形甕	□線1/8	
93	029-02	SR2・II層	須恵器 甕	□線緑斑完存	
94	029-01	SR2・II層	土師器 く字形甕	□線1/2	
95	032-03	SR2・II層	土師器 く字形甕	□線1/5	
96	067-08	SR2・II層	軽石		
97	067-07	SR2・II層	軽石		
98	024-01	SR2・II層	弥生土器 甕	体部1/4	
99	023-05	SR2・II層	弥生土器 高杯	脚上部	
100	020-03	SR2・II層	土師器 高杯	脚下部5/8	
101	025-05	SR2・II層	土師器 有蓋鉢	□線1/2 体部1/3	
102	027-01	SR2・II層	土師器 5字甕	3/4	
103	021-01	SR2・II層	土師器 高杯	□線7/8	
104	021-02	SR2・II層	土師器 高杯	□線1/2 脚緑斑完存	
105	025-02	SR2・II層	土師器 粗製小形丸底甕	完存	
106	020-01	SR2・II層	須恵器高杯蓋	3/16	
107	017-01	SR2・II層	須恵器 高杯	□線1/3 杯3/5 脚1/3	
108	021-03	SR2・II層	須恵器 杯蓋	□線1/30	
109	023-01	SR2・II層	須恵器 杯蓋	□線3/4	
110	025-04	SR2・II層	須恵器 杯蓋	□線1/8	
111	022-03	SR2・II層	須恵器 杯身	□線1/13	
112	025-03	SR2・II層	須恵器 杯身	□線3/8	
113	023-04	SR2・II層	須恵器 杯身	□線1/4	
114	022-02	SR2・II層	須恵器 杯身	□線1/4	
115	020-02	SR2・II層	須恵器 杯身	□線2/3	
116	023-01	SR2・II層	須恵器 甕	□線1/2	
117	025-01	SR2・II層	須恵器 甕	□線1/3	
118	018-01	SR2・II層	須恵器 甕	□線小片 体部緑斑完存	
119	026-02	SR2・II層	須恵器 甕	□線1/4	
120	026-01	SR2・II層	須恵器 甕	□線1/6	

表1-(2) 遺物一覧表

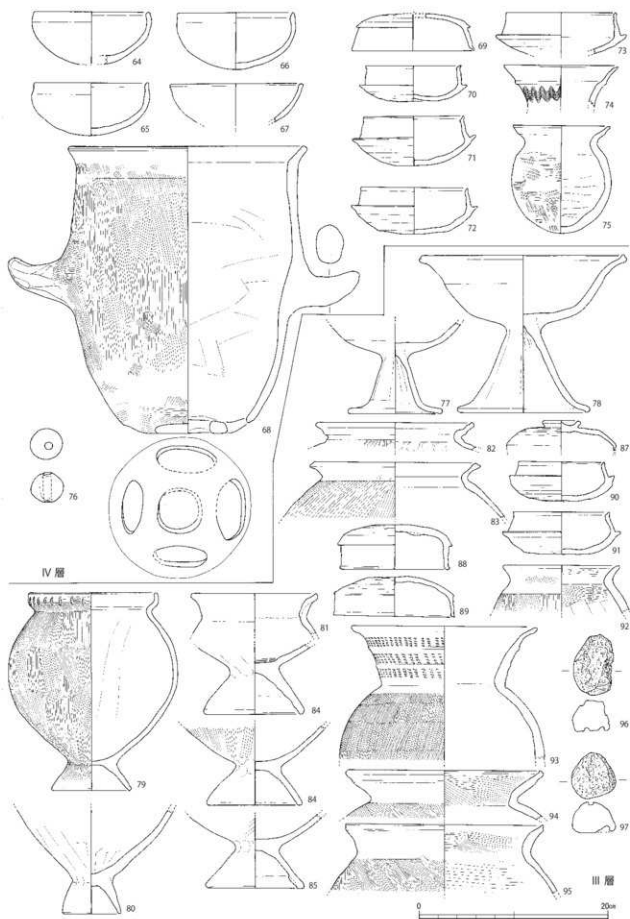
遺物番号	実測番号	出土遺構層序	器種	残存度	備考
121	019-01	SR2・II層	須恵器 依瓶	□線2/3 体部	
122	015-01	SR2・I層	須恵器 短頸甕	□線3/4 体部	
123	015-03	SR2・I層	須恵器 杯身	□線1/2 体部	
124	012-01	SR2・I層	須恵器 火罏	□線1/3	
125	016-01	SR2・I層	須恵器 有蓋鉢	□線1/2	
126	052-06	SR2・層不明	弥生土器 甕	□線1/12	
127	053-01	SR2・層不明	弥生土器 甕	□線完存	
128	066-02	SR2・層不明	弥生土器 甕	□線小片 體部2/5	
129	060-02	SR2・層不明	土師器 ヒヤゴ甕	□線完存 体部3/4	
130	013-01	SR2・層不明	土師器 高杯	完存	
131	013-03	SR2・層不明	土師器 高杯	完存	
132	057-03	SR2・層不明	土師器 丸底甕	体部完存	
133	057-02	SR2・層不明	須恵器 罐	体部	
134	015-02	SR2・層不明	須恵器 有蓋高杯蓋	2/5	
135	010-02	SR2・層不明	須恵器 杯身	1/3	
136	073-05	SR2・層不明	須恵器 杯身	□線1/8	
137	063-03	SR2・層不明	土師 土師器 土師器 高杯	完存	
138	022-06	SR2・層不明	高杯	脚1/2	
139	059-10	SR2	石鉢	完存	
140	059-03	SR2	曹玉	完存	
141	059-01	SR2	滑石製勾玉	完存	
142	059-07	SR2	滑石製白玉	完存	
143	059-08	SR2	滑石製白玉	完存	
144	059-05	SR2	滑石製白玉	完存	
145	059-06	SR2	滑石製白玉	完存	
146	059-09	SR2	滑石製白玉	完存	
147	001-02	包含層	縄文土器	小片	
148	001-03	包含層	縄文土器	小片	
149	002-01	包含層	弥生土器 甕	□線1/6	
150	014-02	包含層	土師器 高杯	杯部完存	
151	010-04	包含層	土師器 高杯	脚3/4	
152	011-01	包含層	土師器 5字甕	□線2/3	
153	013-02	包含層	須恵器 杯蓋	1/3	
154	010-03	包含層	須恵器 杯蓋	□線1/6	
155	010-01	包含層	須恵器 杯身	□線2/3	
156	073-03	包含層	須恵器 杯身	□線1/3	
157	073-02	包含層	須恵器 杯蓋	□線1/5	
158	073-04	包含層	須恵器 杯身	□線小片	
159	013-04	包含層	須恵器 杯身	高台1/4	
160	014-01	包含層	土師器 甕	□線小片	
161	063-04	包含層	磁石	破片	
162	058-01	包含層	軒平瓦	破片	
163	001-01	包含層	軒平瓦	破片	



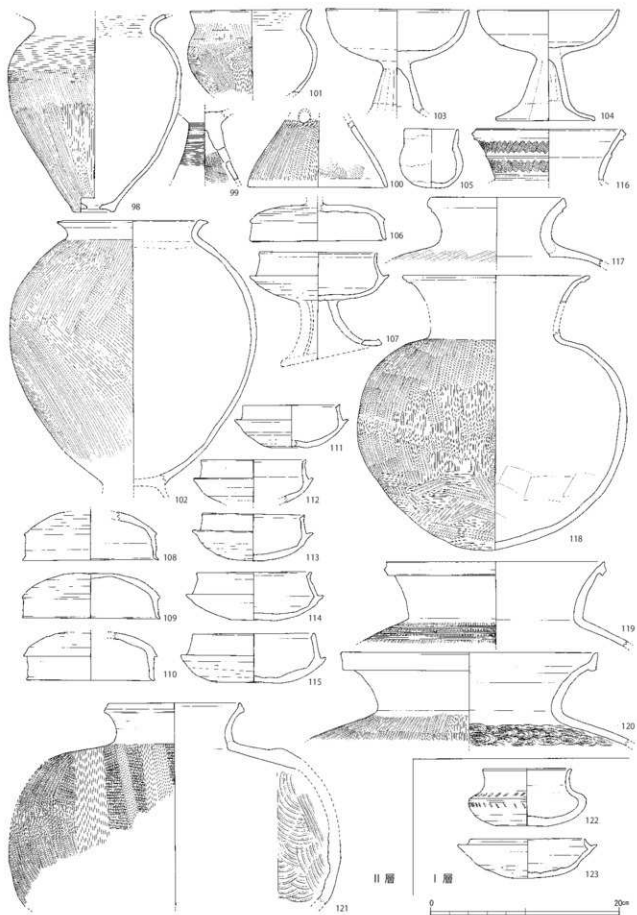
第12図 SR1・2出土遺物(1・2は1:3, 8は1:1, その他は1:4)



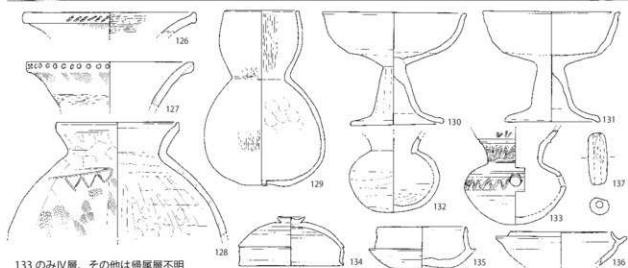
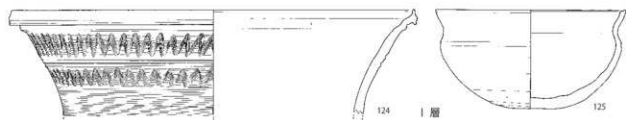
第13圖 SR2出土遺物(1:4)



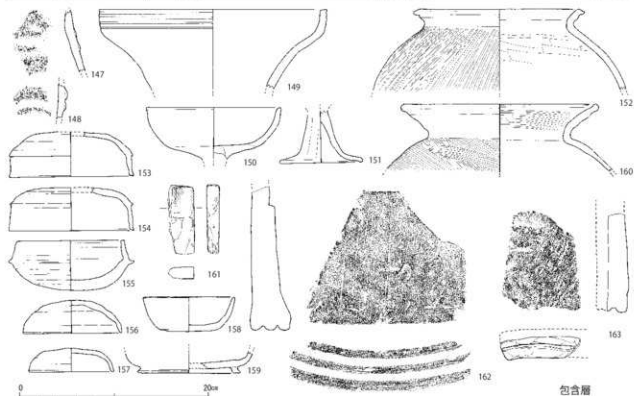
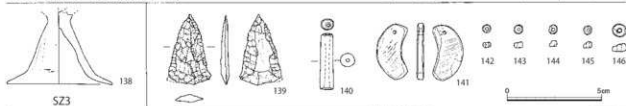
第 14 圖 SR2 出土遺物 (1 : 4)



第15圖 SR2出土遺物(1:4)



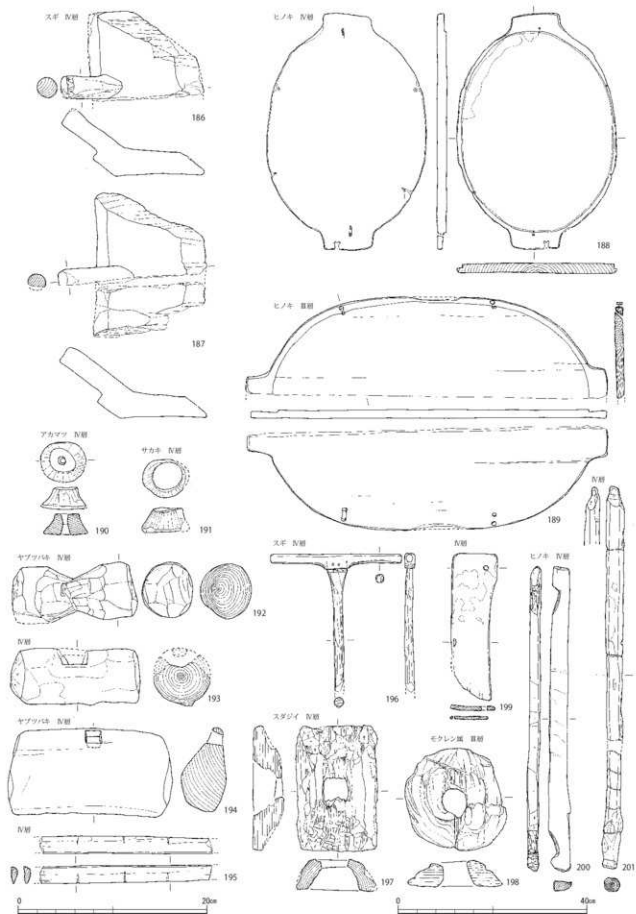
133のみIV層、その他は帰属層不明



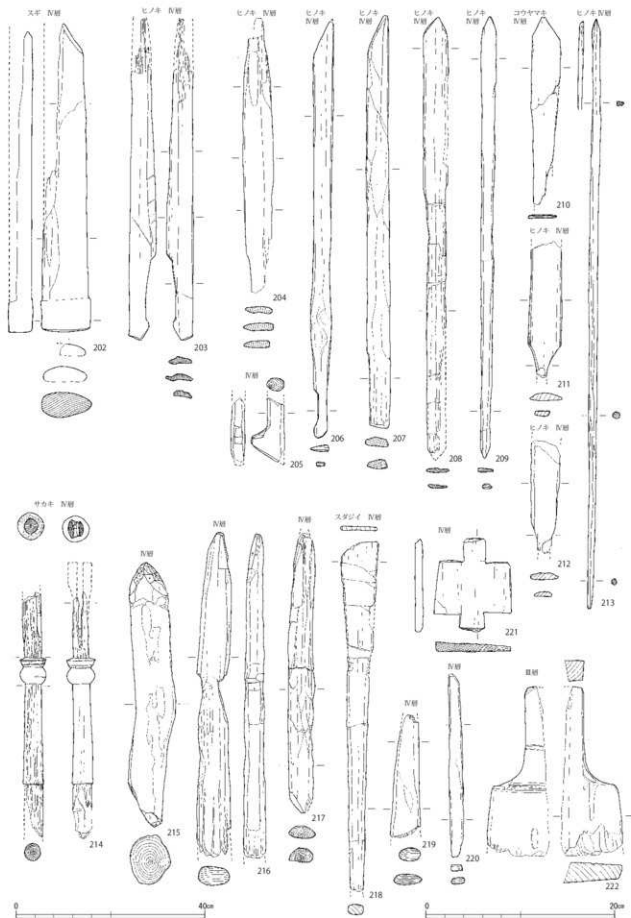
第16図 SR2・包含層出土遺物(139～146は1:2、その他は1:4)

遺物番号	実測番号	出土遺構 出土位置	器種	相種	備考
164	1062-01	SR2・IV層	工具類	サカキ	板状鉄片用
165	1065-02	SR2・IV層	工具類	サカキ	板状鉄片用
166	1007-01	SR2・IV層	直柄広鍔	アカガシ産属	
167	1059-01	SR2・IV層	直柄広鍔	アカガシ産属	
168	1072-01	SR2・IV層	ナスビ形曲柄曲柄文鍔	アカガシ産属	
169	1019-01	SR2・IV層	ナスビ形曲柄曲柄文鍔	アカガシ産属	
170	1018-01	SR2・IV層	ナスビ形曲柄曲柄平鍔	アカガシ産属	
171	1012-01	SR2・III層	ナスビ形曲柄曲柄文鍔		
172	1008-01	SR2・IV層	組み合わせ鍔身	アカガシ産属	
173	1005-01	SR2・IV層	組み合わせ鍔身	アカガシ産属	
174	1030-01	SR2・IV層	エブリ	アカガシ産属	
175	1026-01	SR2・IV層	方形袴付田下駄	スギ	
176	1075-02	SR2・IV層	方形袴付田下駄	コウヤマキ	
177	1023-01	SR2・III層	鎌柄	ヒノキ	
178	1074-01	SR2・IV層	打ち鉾	アカガシ産属	
179	1002-01	SR2・IV層	樽紐	ヤブツバキ	
180	1057-01	SR2・IV層	蟹杵	ヤブツバキ	
181	1056-01	SR2・IV層	臼	クスノキ	
182	1034-03	SR2・IV層	釜		
183	1028-01	SR2・IV層	釜	ヒノキ	
184	1061-03	SR2・IV層	釜	ヒノキ	
185	1006-01	SR2・IV層	釜	ヒノキ	
186	1077-01	SR2・IV層	把手付割物容器	スズ	
187	1077-02	SR2・IV層	把手付割物容器	スズ	
188	1031-01	SR2・III層	曲物	ヒノキ	
189	1033-01	SR2・III層	曲物	ヒノキ	
190	1010-01	SR2・IV層	紡織具 紡繰車	アカマツ	
191	1062-01	SR2・IV層	紡織具 紡繰車	サカキ	
192	1004-01	SR2・IV層	紡織具 木軸	ヤブツバキ	
193	1066-01	SR2・IV層	紡織具 木軸		
194	1081-02	SR2・IV層	紡織具 木軸	ヤブツバキ	
195	1063-02	SR2・IV層	紡織具 繰台目盛り板		
196	1001-01	SR2・IV層	紡織具 杵	スギ	
197	1070-02	SR2・IV層	紡織具 タタリ	スタジイ	
198	1009-01	SR2・III層	紡織具 タタリ	モクレン属	
199	1064-02	SR2・IV層	機織具		
200	1037-01	SR2・IV層	機織具	ヒノキ	
201	1083-01	SR2・IV層	機織具		
202	1021-01	SR2・IV層	刀鞘	スズ	
203	1029-01	SR2・IV層	武器形 刀形	ヒノキ	
204	1015-01	SR2・IV層	武器形 刀形	ヒノキ	
205	1061-01	SR2・IV層	武器形 刀形		
206	1073-01	SR2・IV層	武器形 刀形	ヒノキ	
207	1017-01	SR2・IV層	武器形 刀形	ヒノキ	
208	1079-02	SR2・IV層	武器形 鍔形	ヒノキ	
209	1073-02	SR2・IV層	武器形 鍔形	ヒノキ	
210	1075-01	SR2・IV層	武器形 鍔形	コウヤマキ	
211	1024-02	SR2・IV層	武器形 鍔形	ヒノキ	
212	1024-01	SR2・IV層	武器形 鍔形	ヒノキ	
213	1038-02	SR2・IV層	武器形 鍔形	ヒノキ	
214	1086-01	SR2・IV層	儀仗	サカキ	
215	1070-03	SR2・IV層	男性形		
216	1079-01	SR2・IV層	儀具		
217	1069-02	SR2・IV層	儀具		
218	1061-04	SR2・IV層	儀具	スタジイ	
219	1069-01	SR2・IV層	儀具		
220	1063-03	SR2・IV層	儀具		
221	1058-01	SR2・IV層	儀具		
222	1003-01	SR2・III層	儀具		
223	1071-01	SR2・IV層	建築部材 板材		
224	1040-02	SR2・IV層	建築部材 板材	スタジイ	
225	1076-01	SR2・IV層	建築部材 板材		
226	1055-01	SR2・III層	建築部材 板材	アカガシ産属	
227	1053-01	SR2・IV層	建築部材 構架材	クリ	

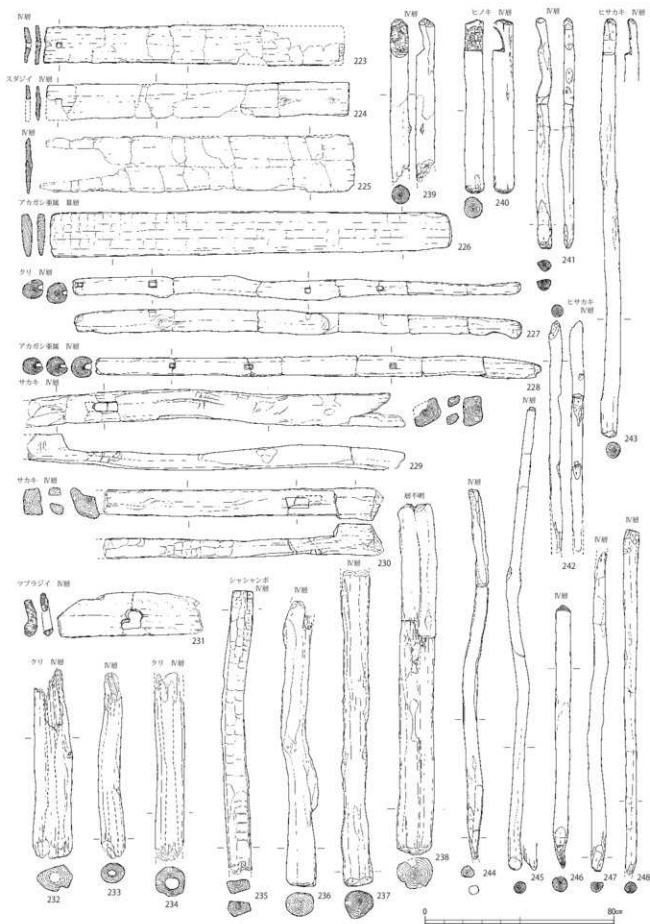
遺物番号	実測番号	出土遺構 出土位置	器種	相種	備考
228	1085-01	SR2・IV層	建築部材 構架材	アカガシ産属	
229	1035-01	SR2・IV層	建築部材 構架材	サカキ	
230	1044-01	SR2・IV層	建築部材 構架材	サカキ	
231	1051-02	SR2・IV層	建築部材 敷設し	ツバラジイ	
232	1046-01	SR2・IV層	建築部材 柱材	クリ	
233	1042-01	SR2・IV層	建築部材 柱材		
234	1041-01	SR2・IV層	建築部材 柱材	クリ	
235	1043-01	SR2・IV層	建築部材 柱材	シャジャンホ	
236	1050-01	SR2・IV層	建築部材 柱材		
237	1054-01	SR2・IV層	建築部材 柱材		
238	1047-01	SR2・層不明	建築部材 柱材		
239	1036-01	SR2・IV層	建築部材 垂木・下地材等		
240	1049-01	SR2・IV層	建築部材 垂木・下地材等		
241	1057-02	SR2・IV層	建築部材 垂木・下地材等		
242	1038-01	SR2・IV層	建築部材 垂木・下地材等	ヒサカキ	
243	1048-01	SR2・IV層	建築部材 垂木・下地材等	ヒサカキ	
244	1038-03	SR2・IV層	建築部材 垂木・下地材等		
245	1040-01	SR2・IV層	建築部材 垂木・下地材等		
246	1052-01	SR2・IV層	建築部材 垂木・下地材等		
247	1039-01	SR2・IV層	建築部材 垂木・下地材等		
248	1045-01	SR2・IV層	建築部材 垂木・下地材等		
249	1014-01	SR2・IV層	有頭棒	ヒノキ	
250	1027-01	SR2・IV層	不明	ヒノキ	
251	1058-02	SR2・IV層	不明		
252	1061-02	SR2・IV層	不明		
253	1029-02	SR2・IV層	不明		
254	1063-01	SR2・IV層	不明		
255	1064-01	SR2・IV層	不明		
256	1034-01	SR2・IV層	不明		
257	1034-02	SR2・IV層	柄	ヒノキ	
258	1062-03	SR2・IV層	柄	ヒサカキ	
259	1045-02	SR2・IV層	柄	ヒノキ	
260	1050-02	SR2・IV層	柄		
261	1025-01	SR2・IV層	柄	ヒノキ	
262	1067-02	SR2・IV層	柄		
263	1067-01	SR2・IV層	柄		
264	1051-01	SR2・IV層	柄		
265	1065-01	SR2・IV層	柄		
266	1068-02	SR2・層下層(V層)	不明		
267	1037-02	SR2・IV層	不明		
268	1062-02	SR2・IV層	不明		
269	1020-01	SR2・IV層	不明		
270	1060-01	SR2・IV層	不明		
271	1068-01	SR2・IV層	不明		
272	1072-02	SR2・IV層	不明		
273	1022-01	SR2・IV層	不明		
274	1013-01	SR2・IV層	不明		
275	1011-01	SR2・III層	不明	サカキ	
276	1081-01	SR2・IV層	不明		
277	1084-01	SR2・IV層	不明		
278	1016-01	SR2・IV層	不明		
279	1078-01	SR2・IV層	不明	スズ	
280	1080-01	SR2・IV層	不明		
281	1070-01	SR2・IV層	不明		
282	1060-02	SR2・IV層	不明		
283	1066-02	SR2・IV層	不明		



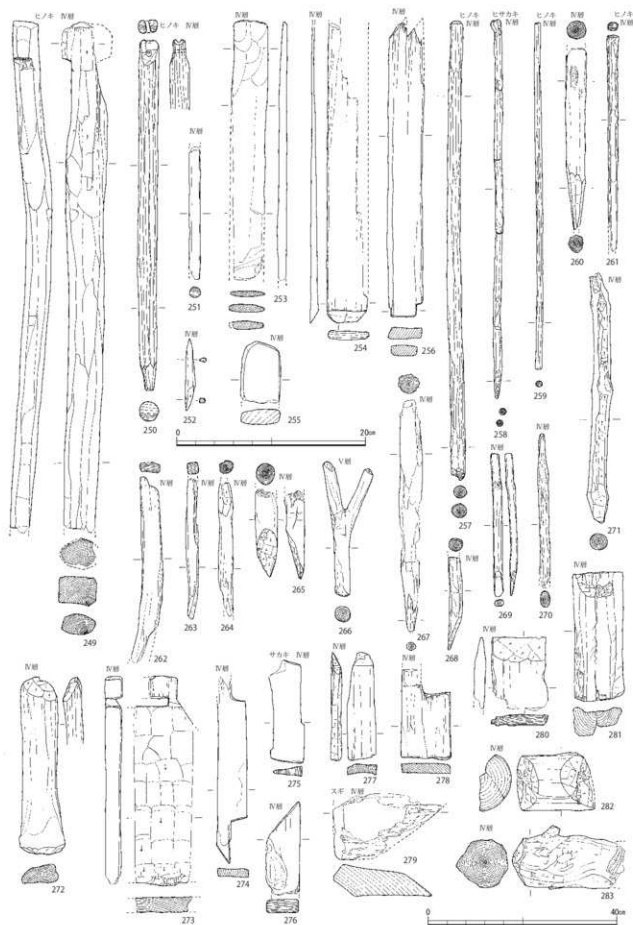
第18図 SR2出土木製品(186～195は1:4、196～201は1:8)



第19図 SR2出土木製品(213・215のみ1:8、その他は1:4)



第20図 SR2出土木製品(1:16)



第21図 SR2出土木製品(249～255は1:4、256～283は1:8)

IV 県道C地区(橋垣内地内)の調査

1 層序

C地区の基本的な層序は、第1層が褐色土の耕土、第2層が青灰色または暗灰色の耕土、第3層が褐色または褐色の旧耕土、第4層が淡褐色または黄灰色の旧耕土、第5層が灰褐色または濃黄灰色系の砂質土または細砂、第6層が灰色粘質土、第7層が黒色または黒灰色の粘質土、第8層が淡黄色粘質土である。

第1・2層の耕土はほぼ全面にみられ、第3・4層の旧耕土・旧床土は調査区南側のみみられる。第5・6層が遺物包含層で、ほぼ全面にみられる。第7層は南側や北端に堆積するが、中央部付近ではみられない。遺構は第7層上面から切り込んでおり、第7層以下が無遺物層となる。

2 遺構

遺構は、掘立柱建物35棟、井戸2基、溝7条、土坑3基、ピット多数を検出した。時代は飛鳥、奈良、平安、江戸の各時代に大別することができる。時代区分については、混乱を避けるために特に支障の無い限り中勢道路橋垣内遺跡調査報告に準じている。

各遺構の規模等については、第3・4表に示したとおりである。

黒色土の検出面に黒色土の遺構埋土の場所もあり、検出は困難を極め、見落としが有るかも知れない。また、掘立柱建物のピットのなかには極端に小さいものもあるが、それは柱掘形が確認できず柱痕跡のみを検出したためであろう。番号を付したピットは遺物が出土したピットである。

(1) 飛鳥時代の遺構

ここでいう飛鳥時代は、概ね7世紀代であり、古墳時代の須恵器編年で扱われるいわゆる古墳時代終焉期を含めた時期である。

①掘立柱建物

掘立柱建物は16棟確認したが、出土遺物により田辺編年のT K 209型式併行期の時期すなわち概ね7世紀初頭～前半と、T K 217型式古段階併行期の時期すなわち概ね7世紀前半～中頃に分けることができる。

T K 209型式併行期の時期の掘立柱建物はS B 22・27・34・36～38・47・48・56の9棟である。

S B 34の柱掘形の平面形が瓢箪形や不定形であることから、柱抜き取り痕と考えられる。なお、S B 38からはT K 43型式併行期の須恵器蓋が1点出土しているが、建物範囲上面の遺物包含層からはT K 209・T K 217型式古段階併行期の時期の須恵器が出土しており、S B 38が単独で他の掘立柱建物よりも古い時期とするより、飛鳥時代とするほうが自然と考えた。

S B 47は出土遺物は皆無であるが、S B 48とは4.2m程離れて棟方向を揃えており、同時期と考えた。

T K 217型式古段階併行期の時期の掘立柱建物はS B 20・21・24・25・31・33・50・53・54の9棟である。S B 20は、出土遺物は無いが、西側梁行がS B 21の東側梁行の延長線上にあり、その距離が3.6mと計画的な配置が窺えることから、同時期の建物と判断した。

②溝

S D 2 T K 217型式新段階併行期、すなわち7世紀中頃から後半の須恵器が出土している。

S D 4 残存長は1.2m程であるが、検出時には掘立柱建物S B 27の南側桁行のほぼ全体にわたって非常に浅く、溝状の遺構として確認できたものであり、布掘の可能性がある。T K 217型式古段階併行期の須恵器杯身が何点か出土しており、またT K 217型式新段階併行期の須恵器杯身・杯蓋も若干出土している。

S D 7 中勢道路橋垣内調査報告ではS D 39とされているもので、中勢道路調査区で検出した他の溝とともに飛鳥時代の居住群を区画して囲む溝とされているものである。今回の調査ではT K 43型式・T K 209型式・T K 217型式古段階各併行期の時期の須恵器杯身が出土している。

S D 10 出土遺物は土師器の小片であるが、切り合いによりS B 38・41よりも古く、一応飛鳥時代とした。

③土坑

S K 1 T K 217型式古段階併行期の須恵器杯が出土している。

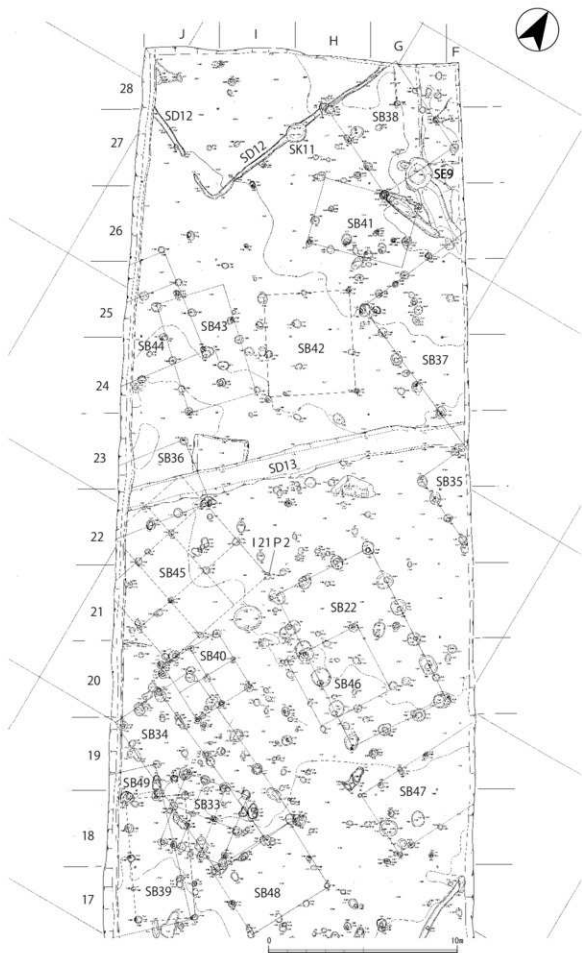
(2) 飛鳥時代または奈良時代の遺構

土師器、須恵器の小片が出土しているが、遺物からは詳細な時期は確定できないため、飛鳥時代または奈良時代とした遺構である。

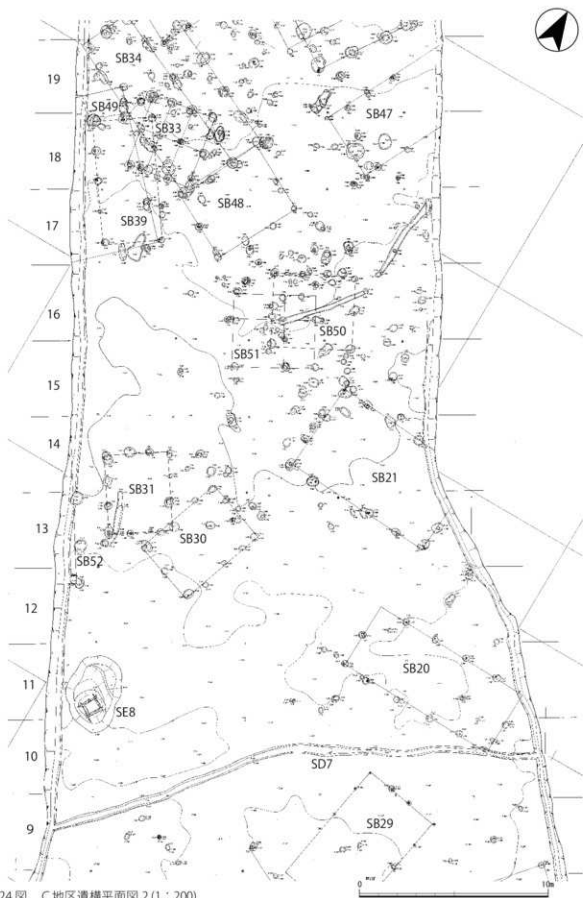
建群	規模(階) 規模(m)	布行柱間寸法(m) 梁行柱間寸法(m)	棟方向 方位	柱穴(m) 柱種(柱)	柱穴名	時代(主な出土遺物)	旧番号	備考
S820	3階×2階 9.2×5.5	1.5+1.8+1.8+1.8+1.8 1.8+1.8	東西棟 E 2° S	0.3 円形	0.2 柱種残存	なし	飛鳥TK217(なし)	S820 23
S821	5階×3階 8.1×4.8	1.5+1.5+1.8+1.8+1.5 1.5+1.5+1.8	東西棟 E 4° S	0.5 ~ 0.7 円形	0.2 ~ 0.3 柱種残存	F13P1, G13P1・2, F14P1, G15P4・5, H14P1・2	飛鳥TK217(土師器、須恵器杯身・鉢蓋)	S821 20
S822	5階以上×3階 9.2×5.5	2.0+1.6+1.8+1.6+2.2 1.8+1.8+1.9	東西棟 E 33° S	0.7 ~ 1.0 円・方形	0.2 ~ 0.3 柱種残存	G19P2, H19P2, G20P1・4, H20P1・2, I21P1	飛鳥TK209(土師器高杯、須恵器杯身)	S822 9
S823	5階×2階以上 6.9×3.0以上	1.5+1.2+1.2+1.5+1.5 α+1.5+1.5	南北棟 N44° E	0.3 ~ 0.5 円形	0.2	J4P4	奈良(土師器・壺)	S823 33
S824	2階×2階 4.2×3.0	2.1+2.1 1.8+1.2	東西棟 E 33° S	0.4 ~ 0.6 円形	0.2	J4P1, J4P2, J5P2・3・5・6	飛鳥TK217(土師器、須恵器杯身・鉢蓋・高杯・甕、灰化物)	S824 32
S825	3階×2階 4.2×3.0	1.2+1.5+1.2 1.2+1.2+1.2	東西棟 E 42° S	0.4 円形	0.2	J5P4・7・8, J6P2・4, K6P1	飛鳥TK217(土師器、須恵器杯身・壺・甕、灰化物)	S825 31
S826	3階×2階 5.0×3.5	2.0+1.5+1.5 1.8+2.2	東西棟 E 27° S	0.2 ~ 0.4 円形	0.2	J7P1・3, K7P2・4	飛鳥=平安(土師器)	S826
S827	4階×3階 7.2×4.5	1.2+2.2+2.4+1.2 1.5+1.5+1.5	東西棟 E 15° S	0.4 ~ 0.7 円形	0.2 ~ 0.3	G6P1・2・4, H6P3, G7P1・2, H7P1	飛鳥TK209(土師器、須恵器蓋)	S827 28
**28								欠番
S829	4階×3階 8.0×4.2	1.8+2.1+2.1+1.5+1.5 1.8+1.2+1.2	南北棟 N10° E	0.3 円形	0.2 柱種残存	G10P1	飛鳥=奈良(土師器、須恵器)	S829 24
S830	4階×3階 5.1×3.6	1.2+1.2+1.5+1.2 1.8+1.8	南北棟 N20° E	0.3 ~ 0.7 円形	0.3	H13P1, J13P1, I14P1	奈良(土師器長頸甕)	S830 22
S831	3階×3階 4.2×3.6	1.2+1.5+1.5 1.2+1.2+1.2	南北棟 N34° W	0.3 ~ 0.7 円形	0.2	J13P2・3・4・5・6, J14P1, J15P2	飛鳥TK217(土師器、須恵器高杯・壺)	S831 21
**32								欠番
S833	3階×2階 3.4×3.8	1.0+1.2+1.2 1.8+2.0	東西棟 E 10° S	0.4 ~ 0.5 円形	0.2 ~ 0.3	I18P6・8・9・10, J18P 1・3・4・6, J19P8	飛鳥TK217(土師器、須恵器杯身・壺・甕)	S833 16
S834	5階×2階+庇 9.8×3.0+1.8	2.1+2.1+2.4+1.6+1.6 1.5+1.5+1.8	東西棟 E 25° S	0.5 ~ 0.8 円形	0.3	H18P1・2, I18P7, J18P2(・5), I19P2, J19P1・6	飛鳥TK209(土師器、須恵器杯身)	S834 13
S835	3階以上×1階以上 1.9以上×2.4以上	1.3+1.3+1.3+ 2+	東西棟 E 25° S	0.4 ~ 0.6 円形	0.2	G22P1, G23P1	飛鳥=平安(土師器)	S835 6
S836	3階以上×2階 1.6以上×3.6	α+1.8+1.8 2階で3.6	南北棟 N37° E	0.5 円形	0.2 ~ 0.3	J22P2・3	飛鳥TK209(土師器、須恵器杯身)	S836 7
S837	3階以上×2階以上 9.0以上×5.7以上	1.8+1.5+1.8+1.8+2.1+α 2.1+2.1+1.5+α	東西棟 E 23° S	0.4 ~ 0.7 円形	0.3 柱種残存	G24P1, G25P3・4・6, H25P1, G26P1・2	飛鳥TK209(土師器、須恵器杯身・壺・甕)	S837 34
S838	3階以上×2階 5.5以上×4.4	2.0+1.9+1.6 2階で4.4	東西棟 E 25° S	0.3 ~ 0.5 円形	0.2	G26P3, G27P1・2, H 27P1・2, H28P1・2・3	飛鳥TK209(土師器、須恵器杯身、灰化物)	S838 1
S839	4階×2階 6.6×3.2	1.6+1.6+1.6+1.8 1.6+1.6	南北棟 N36° W	0.3 ~ 0.4 円形	0.2	J17P1・2・4, J18P7, K18P1・2	平安(土師器、須恵器杯身・壺、灰化物)	S839 15
S840	2階×2階 3.4×3.4	1.7+1.7 1.7+1.7	東西棟 E 29° S	0.3 ~ 0.4 円形	0.2	J19P5, I20P1	飛鳥=平安(土師器)	S840 12
S841	3階×2階 5.1×3.3	1.2+2.1+1.8 2.1+1.2	東西棟 E 15° N	0.4 円形	0.2	G26P3, H26P1	飛鳥=平安(土師器)	2
S842	3階×2階 5.4×4.5	2階で3.3+2.1 2.25+2.25	南北棟 N34° W	0.3 ~ 0.5 円形	0.2	H25P2	飛鳥=平安(土師器)	3
S843	4階×2階 6.0×3.6	1.8+1.2+1.5+1.5 1.2+2階で2.4	東西棟 E 43° S	0.3 ~ 0.4 方形	0.2	J24P3, J25P2・4	飛鳥=奈良(土師器、須恵器)	4
S844	3階以上×2階 1.9以上×5.7	1.8+2.1+α 2.1+1.8+1.8	南北棟 N35° E	0.3 ~ 0.4 方形	0.2	J24P1・2, J25P1・3	飛鳥=奈良(土師器、須恵器・壺)	5
S845	3階×3階 7.0×7.1	2.4+2.4+2.2 2.0+2.7+2.4	東西棟 E 19° S	0.3 ~ 0.4 円形	0.2	J20P3, J21P1, I21P 2, J22P1, J22P1・4, K 22P1	平安(土師器小皿・甕、須恵器、緑釉陶器、山形杯、白磁杯(297))	8
S846	2階×2階 4.2×3.9	1.8+2.4 1.3+2.6	南北棟 E 32° S	0.3 ~ 0.5 円形	0.2	G20P3, H20P5, I20P4	飛鳥=奈良(土師器、須恵器、土甕)	10
S847	3階以上×2階 4.2以上×3.6	1.2+1.2+1.8+α 2階で3.6	南北棟 N26° E	0.2 ~ 0.3 円形	なし		飛鳥TK209	11
S848	3階×2階 4.8×3.9	1.5+1.5+1.8 2.1+1.8	南北棟 N25° E	0.3 ~ 0.6 円形	0.2	I17P2・3, H18P1	飛鳥TK209(土師器、須恵器杯身)	17
S849	4階×2階以上 8.4×2.7以上	2.7+1.8+1.8+2.1 2.1+α	南北棟 N42° W	0.3 ~ 0.4 円形	0.2	J17P1	飛鳥=平安(土師器)	14
S850	3階×2階 4.2×3.9	1.5+1+1.5 1.8+2.1	東西棟 E 27° N	0.3 ~ 0.5 円形	0.2	G15P1, H15P4, H16P2・3・9・10	飛鳥TK217(土師器、須恵器杯身)	18
S851	2階×2階 4.2×3.9	2.7+1.5 1.35+2.55	東西棟 E 29° N	0.4 円形	0.2 ~ 0.3	H15P3, I15P2, H16P4	飛鳥=奈良(土師器、須恵器)	19
S852	2階以上×? 4.2×不明	1.8+2.4+α	南北棟 N34° W	0.7 円形	不明	K12P1・2, K13P1	飛鳥=平安(なし)	5A35
S853	4階×2階 6.9×3.6	2.1+1.35+1.35+2.1 2階で3.6	東西棟 E 41° S	0.3 円形	0.2	D7P2, E7P3, E9P1	飛鳥TK217(土師器、須恵器杯身)	25
S854	2階×2階 4.1×3.9	2.25+1.35 1.5+2.4	東西棟 E 38° S	0.3 ~ 0.5 円形	0.2	E6P1・2, E7P1, F7P1	飛鳥TK217(土師器高杯、須恵器杯身)	26
S855	4階×2階 5.7×3.6	1.3+1.5+1.8+1.2 1.8+1.8	南北棟 N19° E	0.3 ~ 0.5 円形	0.2	G6P1・2, H6P2	飛鳥=奈良(土師器、須恵器)	28
S856	2階×2階 3.0×2.7	1.3+1.8 1.35+1.35	南北棟 N29° E	0.3 ~ 0.6 円形	0.2	J6P3・5, K6P3, J7P2	飛鳥TK209(土師器蓋、須恵器杯身・壺、灰化物)	30

第3表 C地区掘立柱建物一覧表

*旧番号の上段は発掘調査時遺構番号、下段は中勢道路報告書での仮番号



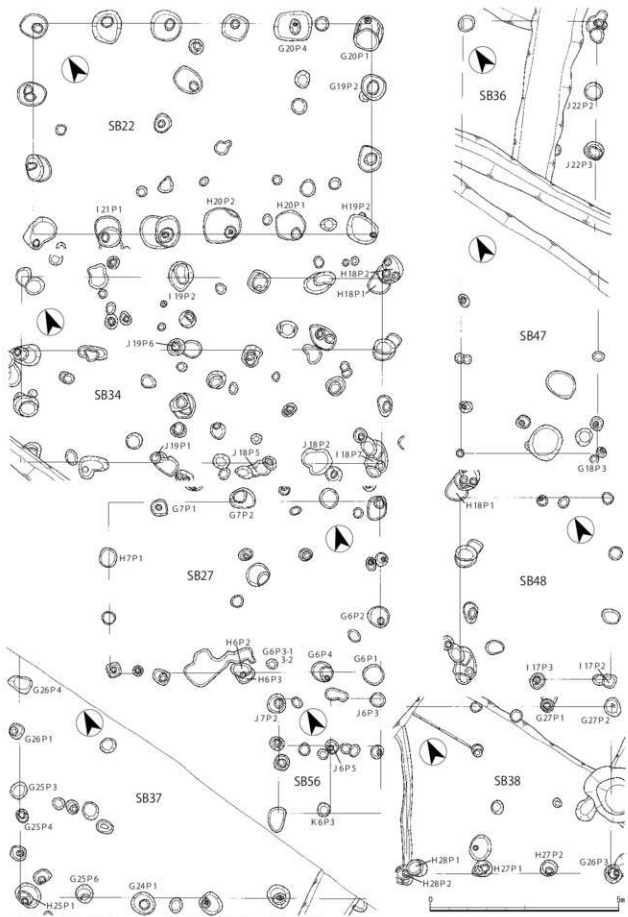
第23图 C地区遺構平面図1(1:200)



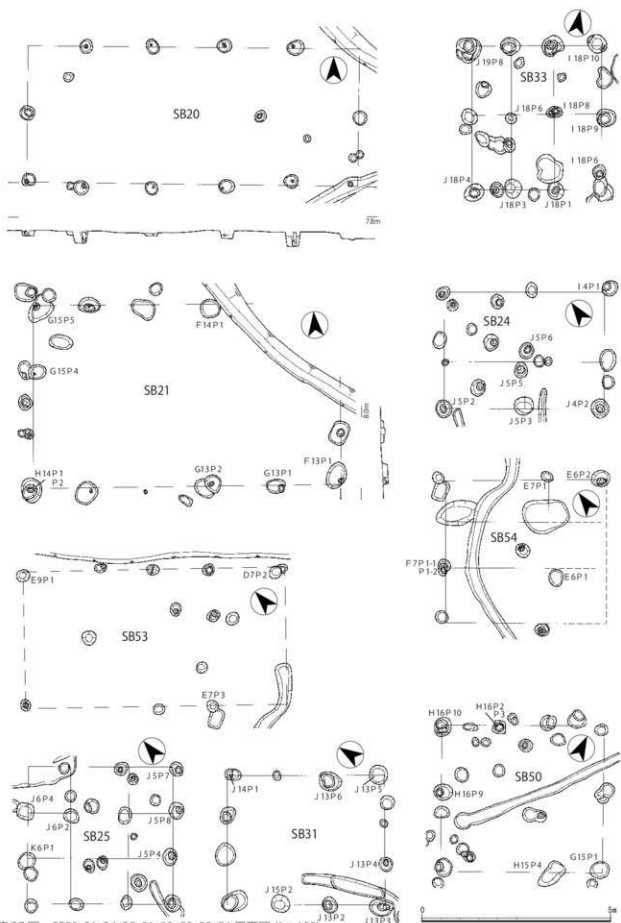
第 24 图 C 地区遗构平面图 2 (1 : 200)



第 25 图 C 地区遺構平面図 3 (1 : 200)



第 26 图 SB22·27·34·36~38·47·48·56 平面图 (1 : 100)



第 27 图 SB20·21·24·25·31·33·50·53·54 平面图 (1 : 100)

と遺構の時期は平安時代の前～中期であろう。

SB45 2間×2間、あるいは東にもう1間のびて3間×2間の可能性もある総柱建物である。出土遺物には、白磁碗(297)、緑釉陶器、平安時代の土師器甕、山茶碗質の陶器があり、11世紀中葉～12世紀前半の建物と考えられる。

②井戸

SE9 平面形は径1.3～1.8mの楕円形で、深さは2.3mである。埋土は第1層が黒灰色粘質土に灰白色粘質土がブロックで混入、第2層が黒灰色粘質土、第3層が暗灰色粘質土である。組石や構造木材が検出されなかったことから素掘りの井戸の可能性が高い。後述する出土遺物の時期は12世紀中葉から13世紀前半であり、埋没期を示すものであろう。

(7) 江戸時代

①溝

SD12 出土遺物には江戸時代の陶器がある。

(8) 時期不明

①溝

SD3 出土遺物は土師器の小片で、遺構の時期は不

明である。

(9) 現代

①溝

SD13 現代の溝であるが、埋土からは須恵器・土師器が少量出土している。

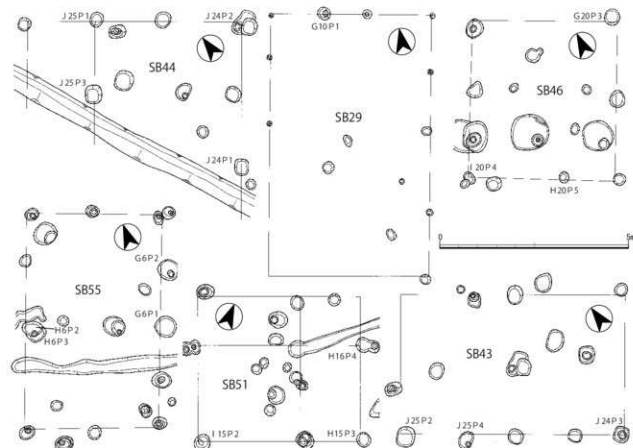
3 遺物

(1) 遺構出土の遺物

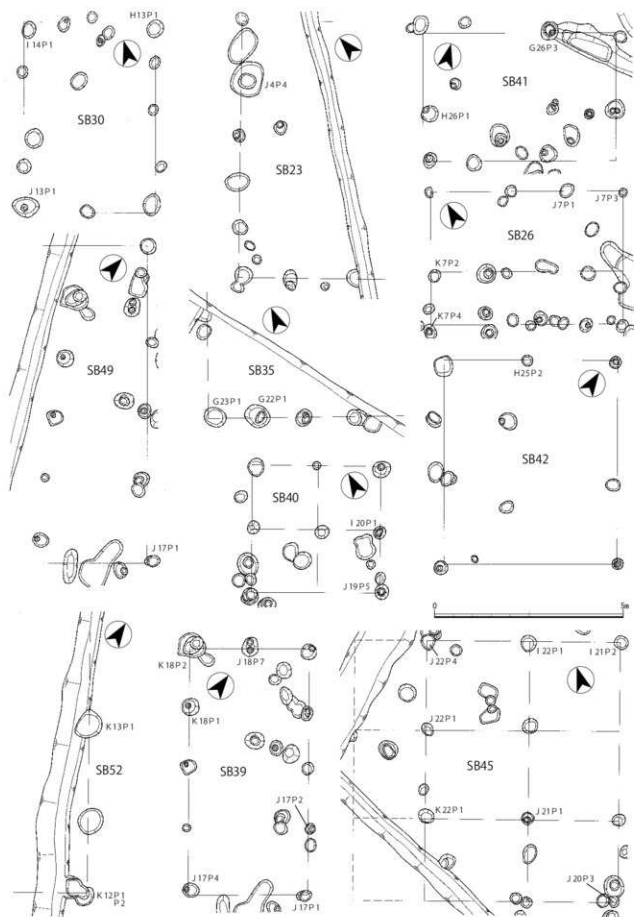
①井戸SE8出土遺物

須恵器杯(284・285) 284は飛鳥時代の須恵器杯で、たちあがりは低く内傾し、受部は水平に近い。体部はロクロナデ、底部から体部にかけてはロクロケズリで、ロクロ回転は時計回りである。底部は未調整である。田辺編年のT K 217型式の古段階に併行する時期である。285は奈良時代の須恵器杯で、高台はやや外に開く。土師器甕(286) 口径14cm、胴部最大径13.5cmの中型の甕である。胴部は球胴で、口縁端部は丸く、胴部の調整は内外面ともハケメである。

井戸枠横板(319～323) 横板は全部で23枚出土したが、14枚がほぼ完形である。このうち残存状況の良



第28図 SB29・43・44・46・51・55 平面図(1:100)



第29图 SB23·26·30·35·39·40·41·42·45·49·52平面图(1:100)

好きな遺物を5枚図示し、それ以外の物はサイズ等を一覧表に記した。長さは112～120cm、幅は16～30cm、厚さは5cm程で、井桁に組むために両端の上下に切り込みを入れてある。321～323などでは、板の表面に手斧痕が明瞭に残る。

モモ 図示しなかったが、モモの核が1個出土している。

②井戸SE9出土遺物

第1層からは近世陶磁器が、第2層からは伊賀焼きの陶器、山皿、土師器片が、第3層からは山茶椀、木製紡錘車が、それぞれ出土した。

土師器甕(287) 口径13.5cm、胴部最大径14.5cm、器高13cmの中型の甕である。胴部は球胴で、口縁端部は外面に面をもつ。調整は胴部が内外面ともハケメ、底部内面がヘラケズリである。

陶器山茶椀(288～292) 体部は丸味があり、内面の底部と体部の境界は屈曲しており、口縁はわずかに外反し端部は丸い。藤澤編年の6型式であり、13世紀前半におさまる時期である。

陶器山皿(293) 底部は平底で、体部は斜めに立ち上がり口縁端部は丸い。藤澤編年の6型式である。

陶器鉢(294) 体部下半から高台部にかけての破片で、体部下半は丸味を帯びている。体部最下部はロクロケズリである。小片のため詳細な時期は決めがたいが、概ね12世紀後半あたりと考えてよいであろう。

陶器甕(295) 頸部が直立して立ち上がり、口縁部は外反し、端部は丸く、内側に沈線を持つ。常滑産で、赤羽・中野編年の2型式期(1150～1175年)である。

青磁椀(296) 龍泉窯系の青磁椀である。高台は断面四角形の削り出し高台で、底部の器壁は厚くなる。施軸は内面全面と外面の体部にみられ、高台畳付部およびその内面は露胎である。底部内面には草花文がみられる。横田・森田編年の1類-2で、時期はⅢ期1小期すなわち12世紀中葉から13世紀初頭のものである。

③掘立柱建物SB45出土遺物

白磁椀(297) 高台の断面は四角形で、削り出し高台である。内面全面と外面の体部に施軸がみられるが、高台畳付部およびその内面は露胎である。横田・森田編年のⅣ類-2で、時期はⅡ期すなわち11世紀中葉から12世紀初頭と考えてよいであろう。

(2) 表土及び遺物包含層等出土の遺物

須惠器杯蓋(298～301) 口径12～13cm、器高4cmで、天井部と口縁部の境界は丸味を帯び、口縁端部は丸い。天井部外面は、298がロクロケズリであり、299～301がヘラ切り未調整である。TK217型式併行期である。

須惠器杯身(302～308) たちあがりは低く、内傾し、受部は水平に近い。体部の調整はいずれもロクロナデである。底部外面は302・303がロクロケズリ、304・305が一部ロクロケズリの未調整、306～308が未調整である。TK217型式併行期である。

須惠器蓋(309) 口径10cmで、口縁端部は丸い。内面にかえりをもつが、その先端は口縁部よりも下方に大きく突出する。天井部中央にはつまみがつく。天井部外面はロクロケズリである。

須惠器壺(310) 高台径3.2cmのミニチュアの壺で、奈良時代のものである。

須惠器壺(311) 胴部最大径11.5cmで、胴部は球胴状である。調整は底部がロクロケズリ、胴部がロクロナデである。

須惠器甕(312) 頸部から口縁部の小片であるが、口径は36cm前後に復元できる。口縁部はやや外反気味で、端部は丸い。頸部には2本を1単位とする沈線と、その間に8～9本を1単位とする波状文やカキ目を施す。

須惠器提瓶(313) 体部前面は丸いが膨らみは少なく、背面はほぼ平坦である。頸部はロクロナデであるが、口縁部は欠損している。体部の前面はカキ目、背面はロクロケズリである。体部の両側の耳は環状であるが、基部のみ残存する。

須惠器杯(314) 口径17cm、器高4cmの高台付きの杯で、奈良時代の遺物である。

ロクロ土師器椀(315) 口径16cmのロクロ製の椀である。体部は内湾気味で、口縁端部は丸い。

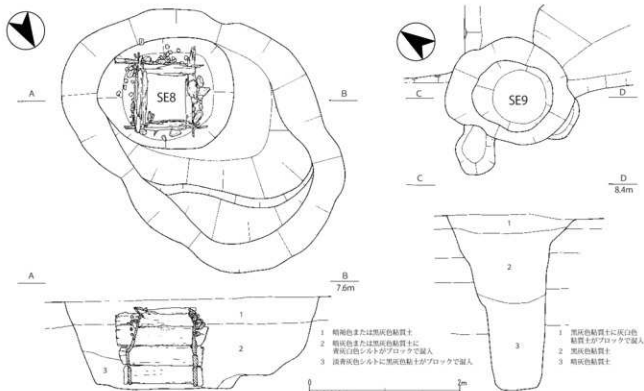
灰釉陶器(316) 高台の断面は退化した三日月形をしている。底部外面はヘラケズリで、ロクロ回転は時計廻りである。折戸53号窯式の前半であろう。

陶器山皿(317) 底部は平底で、口縁端部は外側に面を持つ。

土鍾(318) 径3cm程の球形であるが、蓋みがみられる。径0.7cmの穿孔がある。

遺構名	調査時遺構名	小地区	形状又は方向	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	時代	主な遺物	備考
SK 1	SK 1	J 6	不定形	3.0	1.3	0.2	飛鳥	土師器、須恵器杯、須恵器片	
SD 2	SD 2	J 5、H 5~7	N 42° W	12	1.0	0.1	飛鳥	土師器礎、須恵器	
SD 3	SD 3	G 5	曲線	4.0	0.3	0.05	不明	土師器	
SD 4	SD 4	H 7、G 6	E 15° S	1.2	0.8	0.1	飛鳥	土師器、須恵器杯身・杯蓋、高杯	
SD 5	SD 5	G 5・6	E 14° S	8.5以上	0.4	0.1	奈良	土師器、須恵器杯	中勢調査区SD86
SK 6	SK 6	E 6	隅丸方形	1.1	0.8	0.1	飛鳥 ～ 奈良	土師器、須恵器	
SD 7	SD 7	J K 9、E ~ 110	NE-S W 45° ～E 24° S	2.6	0.5	0.2	飛鳥	土師器礎、須恵器杯身・高杯・礎	
SE 8	SE 8	I 11、J 11	楕円形	4.0	3.0	1.2	奈良	須恵器杯 (284・285)・壺・礎、土師器礎 (286)・瓶・長形礎	
SE 9	SE 9	G 27	楕円形	1.8	1.3	2.3	鎌倉	土師器礎 (287)・山茶桶 (288～292)、山皿 (293)、陶甗鉢 (294)・礎 (295)、青磁甗 (296)	SD38より新
SD10	SD10	G 26	E 8° S	3.5	0.7	0.3	飛鳥以前	土師器	SD38より古 SB 41より古
SK11	SK11	H 27	円形	1.1		0.8	奈良	土師器、須恵器杯身	
SD12	SD12	G H 28、H I J 27	E 25° S N 25° E	17.5以上	0.3	0.05	近世	土師器、須恵器、山茶桶、青磁、近世陶器	L字溝
SD13	SD13	J 22、G ~ T 23	E 43° N	19以上	1.4	0.6	現代	土師器、須恵器	

第4表 C地区井戸、溝、土坑一覧表



第30図 SE8、SE9平面図・断面図(1:50)

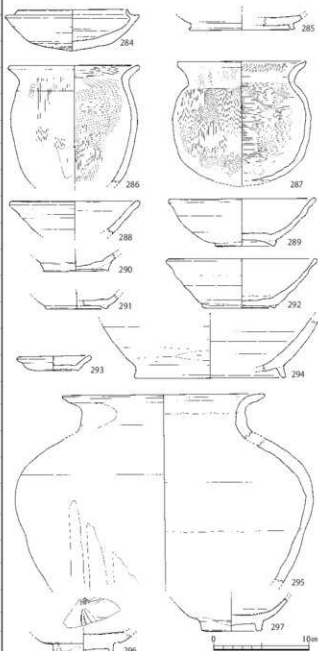
遺物 番号	実測 番号	出土遺構出 土位置	器種	技法の特徴	残存度	備考
284	070-02	SE B	須恵器杯身	ロクロナデ、ロクロケズリ、ヘラ切り未調整	1/4	
285	070-03	SE B	須恵器杯身	ロクロナデ、ロクロケズリ、ヘラ切り未調整	1/3	
286	072-02	SE B 瓶形	土師器壺	ヨコナデ、ハケメ	1/6	
287	072-01	SE 9	土師器壺	ヨコナデ、ハケメ、ケズリ	1/2	二次 焼成
288	070-05	SE 9	山茶椀	ロクロナデ	上半 1/6	
289	056-01	SE 9	山茶椀	ロクロナデ、糸切り磨	完形	
290	071-02	SE 9	山茶椀	ロクロナデ、糸切り磨	底部 1/3	
291	071-03	SE 9	山茶椀	ロクロナデ、糸切り磨	底部 1/3	
292	056-02	SE 9	山茶椀	ロクロナデ、糸切り磨	ほぼ完形	
293	056-03	SE 9	山皿	ロクロナデ、糸切り磨	完形	
294	070-06	SE 9	陶器鉢	ロクロナデ、ロクロケズリ	体部下半 1/8	
295	071-01	SE 9	陶器壺	ナデ、粘土衝撃ぎ	上半部 1/4	
296	072-04	SE 9	青磁椀	削り出し高台、旋輪	底部 1/3	
297	071-04	5845 J21 P 2	白磁椀	削り出し高台、内面に沈線、旋輪	底部	
298	070-01	M 3 表土	須恵器杯身	ロクロナデ、ロクロケズリ	1/3	
299	068-04	J 4 包倉層	須恵器杯身	ロクロナデ、ヘラ切り未調整	完形	
300	068-06	J 4 包倉層	須恵器杯身	ロクロナデ、ヘラ切り未調整	1/3	
301	062-05	J 4 包倉層	須恵器杯身	ロクロナデ、ヘラ切り未調整	1/5	
302	068-01	J 4 包倉層	須恵器杯身	ロクロナデ、ロクロケズリ	2/3	
303	062-04	J 3 包倉層	須恵器杯身	ロクロナデ、ロクロケズリ	1/4	
304	070-04	L3 包倉層	須恵器杯身	ロクロナデ、ロクロケズリ、ヘラ切り未調整	1/3	
305	068-05	K 3 包倉層	須恵器杯身	ロクロナデ、ロクロケズリ、ヘラ切り未調整	1/2	
306	062-03	K 6 包倉層	須恵器杯身	ロクロナデ、ヘラ切り未調整	ほぼ完形	
307	068-02	J 4 包倉層	須恵器杯身	ロクロナデ、ヘラ切り未調整	1/3	
308	062-06	J 4 包倉層	須恵器杯身	ロクロナデ、ヘラ切り未調整	1/7	
309	068-03	J 7 包倉層	須恵器蓋	ロクロナデ	完形	
310	063-02	G 6 包倉層	須恵器ミニチュア壺	ロクロナデ	底部	
311	062-01	H 10 包倉層	須恵器壺	ロクロナデ、ロクロケズリ	体部	
312	069-01	K 4、L 6～ 8 包倉層	須恵器壺	沈線、波状文、カキ目	口縁部 小片	
313	064-01	K 6 包倉層	須恵器椀	カキ目、ロクロナデ、ロクロケズリ、沈線	体部 3/4	
314	068-07	L 7 包倉層	須恵器杯身	ロクロナデ	1/8	
315	069-02	J 7 包倉層	ロクロ土師 器椀	ロクロナデ	2/3	
316	062-02	K 8 包倉層	灰釉陶器	ロクロナデ、ロクロケズリ	底部	
317	063-01	I 27 包倉層	山皿	ロクロナデ、糸切り磨	完形	
318	072-03	J 4 包倉層	土師	ナデ		

第5表 C地区遺物一覧表

4 まとめ

(1) C地区の掘立柱建物群の変遷

橋垣内遺跡C地区の飛鳥～平安時代の掘立柱建物
は、35棟検出した。掘立柱建物は平面形と規模により、
①桁行4～5間×梁行2～3間で平面形が長方形の比
較的大きな側柱建物（以下、長方形型屋という）、②
4間×2間、3間×3間、あるいはそれ以下で平面形
が正方形に近い比較的小さな側柱建物（以下、正方
型屋という）、③2～3間×2～3間の礎柱で倉庫と
考えられる建物（以下、倉庫という）の三種類に分け
ることができる。以下、建物群の変遷を規模とセット



第31図 C地区遺構出土遺物実測図(1:4)

関係を中心に時期順に検討しておきたい。

①飛鳥時代TK209型式併行期（7世紀初頭～前半）

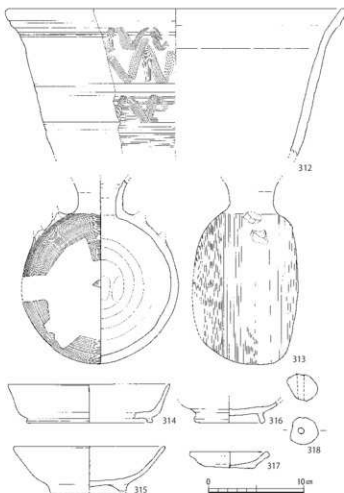
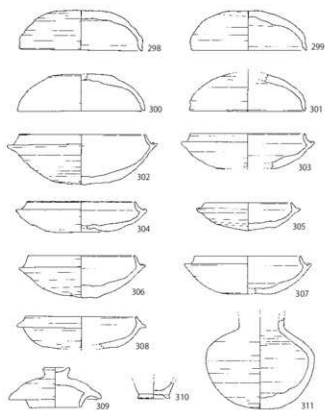
長方形型屋はS B 22・27・34・37の4棟で、いずれも東西棟である。桁行は4～5間、梁行は3～4間または2間+庇で、面積は32～51㎡である。正方形型屋はS B 36・38・48の3棟で、規模は3間×2間、面積は18～24㎡である。倉庫はS B 56の1棟で、面積は8.1㎡である。

この時期の建物群は調査区の北と南に分かれる。

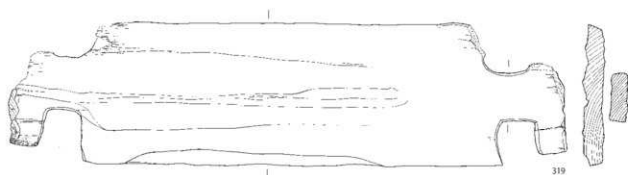
北群はS B 22・34・36～38・47・48の7棟であるが、棟方向によりさらにa～c群に分けることができる。①a群は2棟からなり、長方形型屋のS B 22がE 33° S、正方形型屋のS B 36がN 37° Eでほぼ直交する。②b群は長方形型屋のS B 34・37と正方形型屋のS B 38の3棟からなり棟方向はE 23～25° Sである。S B 37とS B 38がセット関係であるが、S B 34とセットになるべき正方形型屋は調査区外にあると考えてよいであろう。③c群は長方形型屋のS B 47と正方形型屋のS B 48で、棟方向はN 25～26° Eである。なお、b群のS B 34

遺物番号	実測番号	取上位置	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	備考
***	1	北6段目					
***	2	西6段目					破片
***	3	東6段目					破片
***	4	南5段目					破片
***	5	北5段目					
***	6	東5段目					
***	7	北4段目					破片
***	8	西5段目					
***	9	南4段目	116				
***	10	西4段目	120	23			
319	1087-01	11	東4段目	115	30	4	
320	1088-01	12	南3段目	116	25	4	
321	1089-01	13	北3段目	112	24	5	手押磨
322	1090-01	14	西3段目	120	29	5	手押磨
***	15	東3段目	117	18	5		
***	16	北2段目	115	21	5		手押磨
323	1091-01	17	南2段目	115	25	5	手押磨
***	18	東2段目	120	28			
***	19	西2段目	120	16			
***	20	北1段目	114	24	5		手押磨
***	21	南1段目	115	29	5		
***	22	東1段目					
***	23	西1段目	119	24	5		

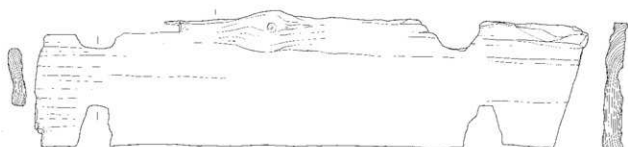
第6表 井戸SE8井戸枠横板一覧表



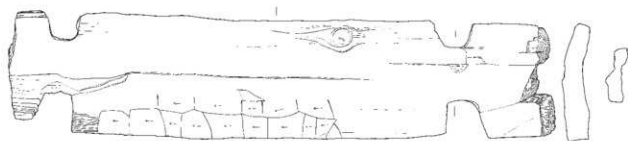
第32図 C地区遺物包含層等出土遺物実測図(1:4)



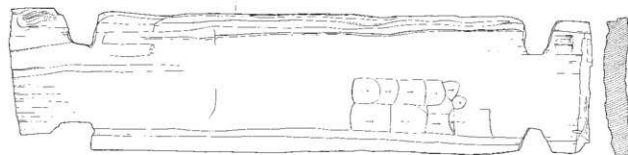
319



320



321



322



323

0 40mm

第33图 井戸SE8出土木製品実測図(1:8)

とe群のS B 48の切り合いは不明である。

南群はS B 27とS B 56からなるが、この2棟は棟方向が異なっており、若干の時期差があると考えられる。一応S B 27をd群、S B 56をe群としておく。南群の建物は調査区の端に位置しており、中勢道路調査区で確認された建物との関連が考えられる。

この時期の建物は、長方形型屋と正方形型屋の2棟をセットとしている。また、1棟しか確認できなかったが、倉庫もみられる。

②飛鳥時代TK217型式古段階併行期(7世紀前半~中期)

掘立柱建物は調査区の中央から南端にかけてみられる。長方形型屋はS B 20・21・53の3棟である。いずれも桁行4~5間の東西棟であるが、面積は25~39㎡と前の時期に比べやや小さくなる。正方形型屋は、S B 31・50の2棟であり、ともに南北棟である。面積は14~15㎡ほどで、前の時期に比べやや小さくなる。倉庫はS B 24・25・33・54の4棟であるが、面積は12~16㎡で前の時期に比べ大きくなる。S B 33の平面形は、桁行が梁行より短いという構造である。

当該期の建物は棟方向が揃っているものは少ないが、若干の幅を容認すればf~iの4群に分けることができる。①f群は長方形型屋のS B 20・21と倉庫のS B 33の3棟からなり、棟方向はE 2~10°Sである。②g群は倉庫のS B 24とS B 54からなり、棟方向はE 33~38°Sである。③h群は長方形型屋のS B 53と倉庫のS B 25からなり、棟方向はE 41~42°Sである。④i群は2棟とも正方形型屋で、S B 31がN 34°W、S B 50がE 27°Nと概ね直交する。g群とh群は、S B 24とS B 25、S B 54とS B 53がそれぞれ重複しているが、新旧関係は不明である。また、g群とh群は調査南端に位置しており、中勢道路調査区の建物も含めた検討が必要である。

この時期では2~3棟を1組としたセット関係で群を構成しており、多くの場合1棟の倉庫が含まれることが特徴である。

③奈良時代

確実に奈良時代に限定できる掘立柱建物は、長方形型屋のS B 23・30の2棟だけである。建物の面積はS B 30が18㎡ほどであり、前の時期に比べて

さらに小さくなる傾向にある。建物群の把握にあたっては不明な点が多い時期であるが、一応、S B 23をj群、S B 30をk群としておく。S B 30の南約30mには井戸S E 8があるが、セット関係であろう。S B 23は調査区の南端で検出されたもので、棟方向がN 44°Eである。奈良時代の建物は中勢道路調査区でも多数確認されており、その中にはS B 23と棟方向を揃える建物が相当数みられる。

④平安時代

平安時代の掘立柱建物はS B 39・45の2棟である。S B 39は長方形型屋の側柱建物で面積は21㎡であり、時期は平安時代前~中期である。S B 45はいわゆる総柱建物で面積は50㎡であり、平安時代後期以降である。なお、S B 45の北約20mに位置する井戸S E 9は平安時代末期~鎌倉時代初頭の遺物が出土しているが、これは埋没期を示す遺物である。したがって、掘立柱建物S B 45と井戸S E 9は同時期に存在していたと考えてよいであろう。平安時代の建物は中勢道路調査区でも3棟が相当の距離をおいて確認されており、各建物は単独で存在していた時期と考えられる。

(2) 今後の課題

以上、C地区の掘立柱建物群を時期順に検討してきたが、いくつかの課題が残っている。

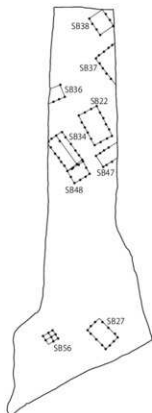
1点目は、上記の検討では時期を細分できずに飛鳥~奈良時代、飛鳥~平安時代とした掘立柱建物を対象して検討を行ったことである。今後、様々な視点からの検討により、これらの建物の評価を定めることが必要と考える。

次に、中勢道路調査区で検出した建物群を含めた橋垣内遺跡全体での検討である。中勢道路調査区では、飛鳥~平安時代の掘立柱建物は133棟確認されており、C地区の35棟を合わせると合計168棟になる。各建物の時期は判断されているが、橋垣内遺跡全体を対象にして建物の棟方向や位置関係を基にそのセット関係を検討することが今後の課題である。

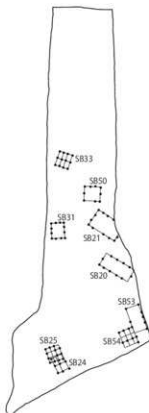
なお、橋垣内遺跡の周辺に所在する六大A遺跡、六大B遺跡、大古曾遺跡、安養院跡などを含めた古代の集落や部衛等の問題についてはすでに、既刊の報告書に記載されているので参照されたい。

(川戸達也・河北秀実)

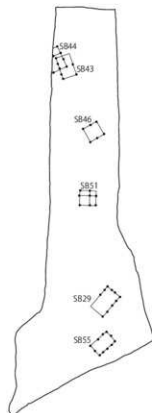
飛鳥時代 TK209 型式併行期



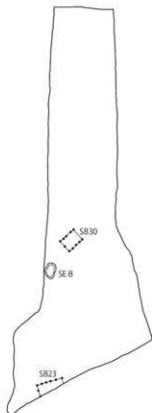
飛鳥時代 TK217 型式古段階併行期



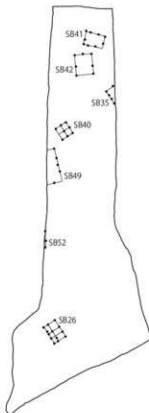
飛鳥時代または奈良時代



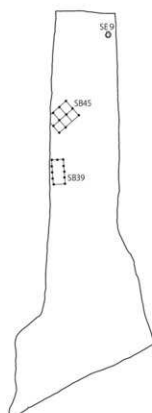
奈良時代



飛鳥、奈良、平安時代のいずれか



平安時代



第 34 図 掘立柱建物変遷図

V 県道A地区(丸垣内地区)の調査

1 層序

A地区は、本年度の調査範囲の北西端に位置し、平成2年度以前は標高11～12mの水田であった。しかし、平成2年度に行われた団体営は場整備の際にかなり深くまで削平を受けていた。

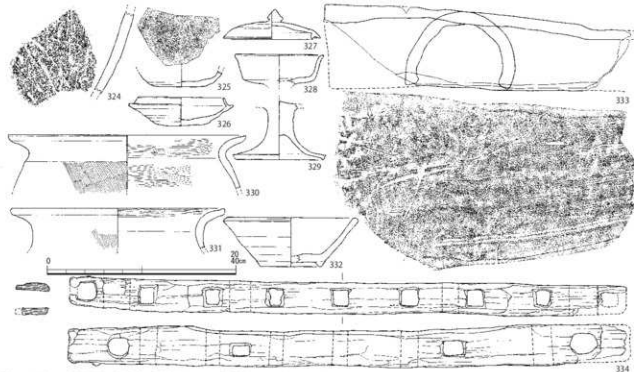
この地区の基本的な層序は、第1層表土、第2層褐色粘質土、第3層暗褐色～黒褐色粘土、第4層褐色～灰白色砂であり、第2層に遺物の包含が見られる。

遺物番号	実測番号	出土遺構 出土位置	器種	技法の特長等	残存度	備考
324	002-02	C9河道	縄文土器 深鉢	内面ナデ 外面ケズリ	小片	
325	009-02	B3包合層	須恵器杯身	ロクロナデ ヘラ切り未調整	底部	底部内面に ヘラ記号
326	009-01	B3包合層	須恵器杯身	ロクロナデ ヘラ切り未調整	2/3	
327	003-01	D5包合層	須恵器杯蓋	ロクロナデ ロクロナズリ	完形	
328	073-07	D5包合層	須恵器高杆	ロクロナデ	幹部 1/8	
329	074-04	D2包合層	須恵器高杆	ロクロナデ	幹部	
330	074-02	D3包合層	土師器甕	ヨコナデ ハケ目	口縁部 1/8	
331	074-01	D3包合層	土師器甕	ヨコナデ ハケ目	口縁部 1/5	
332	073-01	表土	山茶碗	ロクロナデ 糸切り歯 砂面角目	1/4	
333	006-01	SR2上層	丸瓦	凸面ナデ 無面ケズリ	狭縁側 欠損	
334	1032-01	SR2	木製品 馬鞍台木		ほぼ 完形	

第7表 A地区出土遺物一覧表



第35図 A地区遺構平面図(1:400)



第36図 A地区出土遺物実測図(1:4ただし334は1:8)

2 遺構

(1) 旧河道

SR1 幅5～9m、深さ20～30cm程の旧河道で、北東から南西に流れていたと考えられる。SR2によって切られているが、埋土はSR2上層と大きな相違が無いため、SR2の時期に近いと考えられる。

SR2 幅4～7m、深さ20～110cmの旧河道である。標高は、北西端で10.6m、南東端で9.9mで、南東に向かって徐々に深くなっており、北西から南東に流れていたと想定できる。埋土は黒色粘質土である。上層から丸瓦、埋土から須恵器杯と馬鎌が出土している。A地区の北側に隣接する大垣内遺跡の第1次調査A地区では、SR2の続きが長さ50m程検出されており、古墳時代から奈良時代の遺物が出土している。

3 遺物

縄文土器(324) 深鉢の体部下方の小片で、外面はケズリ、内面はナデである。晩期後半のものである。須恵器杯身(325・326) 325は底部の破片であるが、内面には \oplus 形のヘラ記号がみられる。326は口径9cmと小型化しており、たちあがりは低く内傾し、受部は水平に近い。体部はロクロナデで、底部はヘラ切り未調整である。ロクロ回転は時計廻りである。TK217型式併行期である。

須恵器杯蓋(327) 天井部の中央につまみがつく。内面にかえりをもち、かえりは口縁端部よりも若干下方へ突出する。天井部外面はロクロケズリである。TK217型式に併行する時期のものであろう。須恵器高杯(328・329) 328は杯部、329は脚部であるが、別個体である。328は口縁部が外反し、全体はロクロナデである。

土師器甕(330・331) 口径が23～25cmと大きく、長胴甕になるものと思われる。口縁部は、330は外面に面をもち、331は内側に若干つまみ上げる。

山茶椀(332) 体部は直線的で、口縁端部は外面に面をもつ。藤澤編年の7型式、13世紀後半である。

丸瓦(333) 行基式丸瓦で、凹面は側面側を面取りし、一部に工具痕跡が残る。凸面はナデにより叩き痕を完全に消しているが、一部に布目痕がみられ

る。側面はヘラケズリである。広端面はヘラケズリで調整するが、薫痕跡が残っている。色調は灰色で、焼成は堅く、胎土には砂粒を含む。

馬鎌台木(334) 長さ119cm、一辺8×6cmである。歯孔は一辺4cmで、9個がほぼ等間隔に上下面に貫通する。引棒孔は径4～6cmの円形で、両端から1孔目と2孔目の歯孔間の側面に貫通させる。柄孔は4cm×3cmの長方形で、両端から3孔目と4孔目の歯孔間の側面に貫通させる。

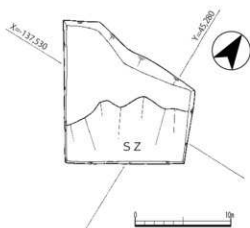
(川戸達也・河北秀実)

VI 拡張区の調査

拡張区はC地区のすぐ北側で、Ⅲ-2トレンチを拡張したもので、東西12m、南北8～14mである。基本的層序は、第1層が表土、第2層が淡褐色細砂の地山である。

SZ 調査区南半の落ち込みである。埋土は、第1層が黄褐色砂礫土に粘土が混入、第2層が灰色または暗灰色粗砂と黒色粘質土の互層、第3層が灰白色砂礫である。

(川戸達也・河北秀実)



第37図 拡張区平面図(1:400)

VII 採集遺物

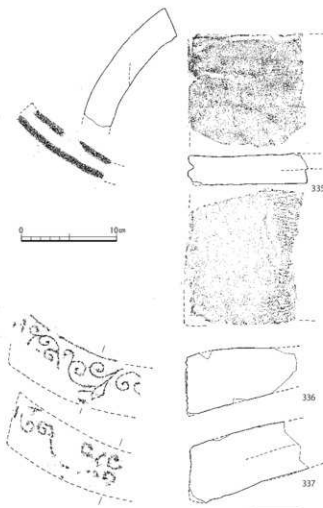
調査区周辺での採集遺物で、以下に軒平瓦三点を紹介しておく。

軒平瓦 (335) 瓦当文様は二重弧文で、瓦当部左半部が残存する。顎は段顎で、顎長は 12cm ある。凹面には布目痕、凸面には縄目痕が残る。凹面に粘土板合わせ目痕がみられるが、重ね方は S である。色調は暗灰色で、焼成は堅く、胎土には砂粒を含む。

軒平瓦 (336) 瓦当文様は均整唐草文で、瓦当部

遺物番号	実測番号	出土遺構 出土位置	器種	技法の特徴等	残存度	備考
335	003-02	表面採集	二重弧文 軒平瓦	凹面布目 凸面縄目・ナデ	瓦当部 左半分	
336	005-01	表面採集	均整唐草文 軒平瓦	凹面ケズリ 凸面縄目・ナデ	瓦当部 左半分	
337	005-01	表面採集	均整唐草文 軒平瓦	凹面ケズリ 凸面ナデ	瓦当部 左半分	

第 8 表 採集遺物一覧表



第 38 図 採集遺物実測図 (1:4)

左半部が残存する。内区の文様は通常の均整唐草文を上下逆転させている。中心飾りは C 字下向である。唐草文は中心飾りの上部から伸びる。第 1 支葉は上方向に反転し、第 2 支葉は下方向に伸びるが先端は欠損のため不明である。第 3 支葉は上方向に伸び、途中で分岐し、それぞれが反転する。第 4 支葉は下方向に伸びるが、第 2 支葉と合体して、あたかも中空の管状となるが、その先端は欠損のため不明である。茎は第 4 支葉を派生させたその先は、欠損しているが、先端部は支葉が、下方、下方、上方、下方の順に反転し、終息する。内区は界線で囲まれており、外区は、脇区のみが存在し、上外区と下外区はない。脇区は幅 1cm であるが、残存度が悪く文様構成は不明である。顎は曲線顎になるものと思われる。色調は暗灰色で、焼成は堅く、胎土には砂粒を含む。

軒平瓦 (337) 瓦当文様は唐草文で、瓦当部左半部が残存する。反転する支葉が、何力所かみられる。文様の彫りは浅く、また文様部の剝離が激しいため、全体の文様構成は不明である。最初に文様部分の粘土を范に埋め込み、その後、瓦当全体の粘土を押し当てている。色調は灰色で、焼成は堅く、胎土には砂粒を含む。

(河北秀実)

〔註〕

- (1) 周辺の道跡については、下記の文献を参考にした。
 a. 津市教育委員会『上津部田城址発掘調査報告 1989』
 b. 津市教育委員会『上津部田城址（第2次）発掘調査報告』1992
 c. 津市教育委員会『三重県津市道跡地図』1988
 d. 三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』1991
- (2) 三重県埋蔵文化財センター『東浦道跡ほか』『東浦道跡・椋木南方道跡ほか』1993
- (3) 安濃町道跡調査会『平田古墳群』1987
- (4) 三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター『大里地区道跡群』『平成3年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告 第1分冊』1992
- (5) 〔註〕(1) cに同じ
- (6) 三重県埋蔵文化財センター『宮ノ前道跡』『一般国道23号中勢道路（9工区）建設事業に伴う大古曾道跡・山龍道跡・宮ノ前道跡発掘調査報告』1995
- (7) 三重県埋蔵文化財センター『松ノ木道跡』『一般国道23号中勢道路（9工区）建設事業に伴う松ノ木道跡・森山東道跡・太田道跡発掘調査報告』1993
- (8) 三重県教育委員会『納所道跡—道構と遺物—』1980
- (9) 三重県教育委員会『上の内道跡—付一北端道跡』『昭和50年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』1976
- (10) 三重県教育委員会『多倉田道発掘調査報告』1981
 a. 津市教育委員会『長道跡発掘調査報告』1989
 b. 三重県埋蔵文化財センター『一般国道23号中勢道路（9工区）建設事業に伴う長道跡発掘調査報告』2000
 c. 津市教育委員会『長道跡発掘調査報告』2005
- (12) 三重県埋蔵文化財センター『山龍道跡』『一般国道23号中勢道路（9工区）建設事業に伴う大古曾道跡・山龍道跡・宮ノ前道跡発掘調査報告』1995
- (13) 三重県教育委員会『森山東道跡』『一般国道23号中勢道路（9工区）建設事業に伴う松ノ木道跡・森山東道跡・太田道跡発掘調査報告』1993
- (14) 津市教育委員会『中意道跡発掘調査報告』1977
- (15) a. 三重県埋蔵文化財センター『一般国道23号中勢道路（8工区）建設事業に伴う六A道跡発掘調査報告（本製品編）』2000
 b. 三重県埋蔵文化財センター『一般国道23号中勢道路（8工区）建設事業に伴う六A道跡発掘調査報告』2002
 c. 三重県埋蔵文化財センター『六A道跡発掘調査報告—資料分析・遺物観察表・写真図版編—』2003
- (16) 津市教育委員会『墓の谷1号墳発掘調査報告』1976
- (17) 三重県埋蔵文化財センター『一般国道23号中勢道路（9工区）建設事業に伴う西岡古墳発掘調査報告』1995
- (18) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査出土土簡概報Ⅱ』1978
- (19) 京都大学文学部国語学国文学研究室編『諸本集成徳名類聚抄（本文編）』臨川書店
- (20) 津市教育委員会『安養院跡発掘調査報告』1990
- (21) 三重県埋蔵文化財センター『一般国道23号中勢道路（9工区）建設事業に伴う六B道跡（B-1地区）発掘調査報告』2006
- (22) 三重県埋蔵文化財センター『大古曾道跡』『一般国道23号中勢道路（9工区）建設事業に伴う大古曾道跡・山龍道跡・宮ノ前道跡発掘調査報告』1995
- (23) 三重県埋蔵文化財センター『一般国道23号中勢道路（9工区）建設事業に伴う横垣内道跡発掘調査報告』1997

- (24) 三重県埋蔵文化財センター『津市大里窪田町大垣内道跡』1993（現地説明会資料）
- (25) 統群書類完成会『統群書類第1輯』所収（1987年訂正三版）
- (26) a. 三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報 9 昭和53年度』1979
 b. 三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報 14 昭和58年度』1984
 c. 三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報 15 昭和59年度』1985
 d. 津市教育委員会『川北道跡、川北城跡発掘調査報告』2005
- (27) 三重県埋蔵文化財センター『冨治城跡』1990
- (28) a. 〔註〕(1) aに同じ
 b. 〔註〕(1) bに同じ
 c. 津市教育委員会『上津部田城址（第3次）発掘調査報告』1992
- (29) 三重県教育委員会『大和街道伊勢別街道伊賀街道—歴史の道調査報告書—』1983
- (30) 三重県埋蔵文化財センター『一般国道23号中勢道路（9工区）建設事業に伴う六A道跡（A地区）発掘調査報告』1999
- (31) 樋上昇『儀杖の系譜』『考古学研究 52-4』2006
- (32) 〔註〕(31)に同じ
- (33) 〔註〕(31) aに同じ
- (34) 〔註〕(23)に同じ
- (35) 田辺昭三『陶器古泉地群Ⅰ』平安学園考古クラブ 1966
- (36) 宇野隆夫『井戸考』『考古資料にみる古代と中世の歴史と社会』(有風閣社)
- (37) 山茶梅の編年については、主として下記の文献を参考にした
 a. 藤澤良祐『瀬戸古窯地群Ⅰ』『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅰ』瀬戸市歴史民俗資料館 1982
 b. 藤澤良祐『穴田南窯群発掘調査報告』『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅱ』瀬戸市歴史民俗資料館 1983
 c. 藤澤良祐『山茶梅研究の現状と課題』『研究紀要 第3号』三重県埋蔵文化財センター 1994
- (38) a. 中野晴久『赤羽・中野 生産地における編年について』『全国シンポジウム 中世常滑焼を巡って 資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所 1994
 b. 中野晴久『常滑・瀬美』『全国シンポジウム 中世窯業の諸相—生産技術の展開と編年—』2005
- (39) a. 横田賢次郎・森田勉『大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—』九州歴史資料館研究論集 4 1987
 b. 森田勉『鎌倉出土の中国陶磁器に関して』『貿易陶磁研究 №1』日本貿易陶磁研究会 1981
- (40) 灰輪陶器の編年については、主として下記の文献を参考にした
 a. 橋崎彰一ほか『愛知県豊田山西南麓古窯跡群分布調査報告（Ⅰ）』愛知県教育委員会 1980
 b. 藤澤良祐『瀬戸古窯地群Ⅰ』『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅰ』瀬戸市歴史民俗資料館 1982
 c. 斎藤孝正『猿投窯における灰輪陶の展開』『月刊考古学ジャーナル №211』ニュー・サイエンス社 1982
 d. 橋崎彰一ほか『愛知県古窯跡群分布調査報告（Ⅱ）』愛知県教育委員会 1983



B地区全景(北から)



B地区 SR2遺物出土状況



B地区 SR2遺物出土状況(西から)



B地区 SR2遺物出土状況



B地区 SR2遺物出土状況



B地区 SR2遺物出土状況



B地区 SR2(東から)



C地区(北上空から)



C地区全景(東上空から)



C地区全景(北から)



C地区 SB22(南から)



C地区 SB20(西から)



C地区 SB21(西から)



C地区 SB31(南から)



C地区 SB30(北から)



C地区 SE8(東から)



C地区 SE8 (南から)



C地区 SE8 (北から)



C地区 SE9



A地区 全景 (南から)



164



165



166



167



170



171



168



169



172



172

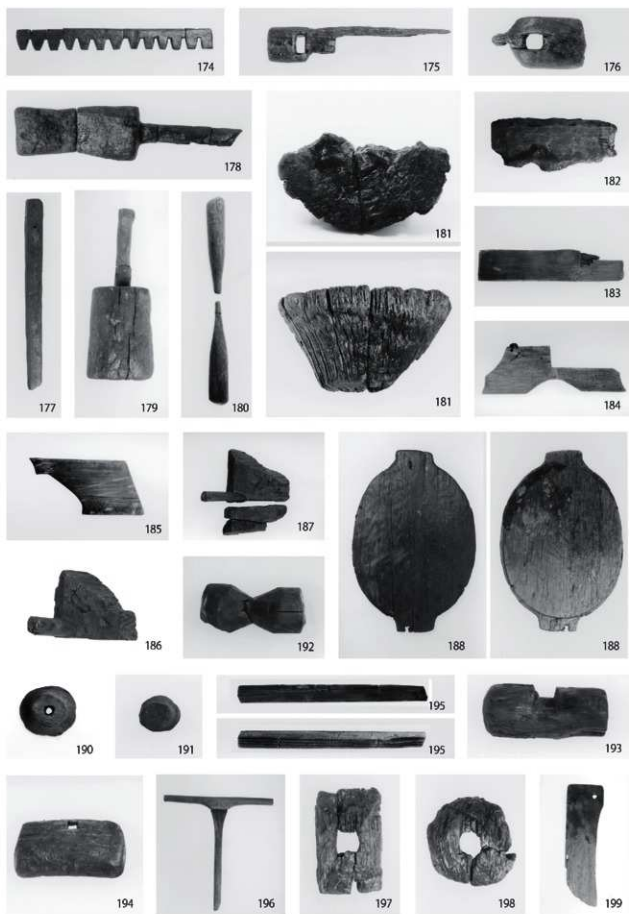


173

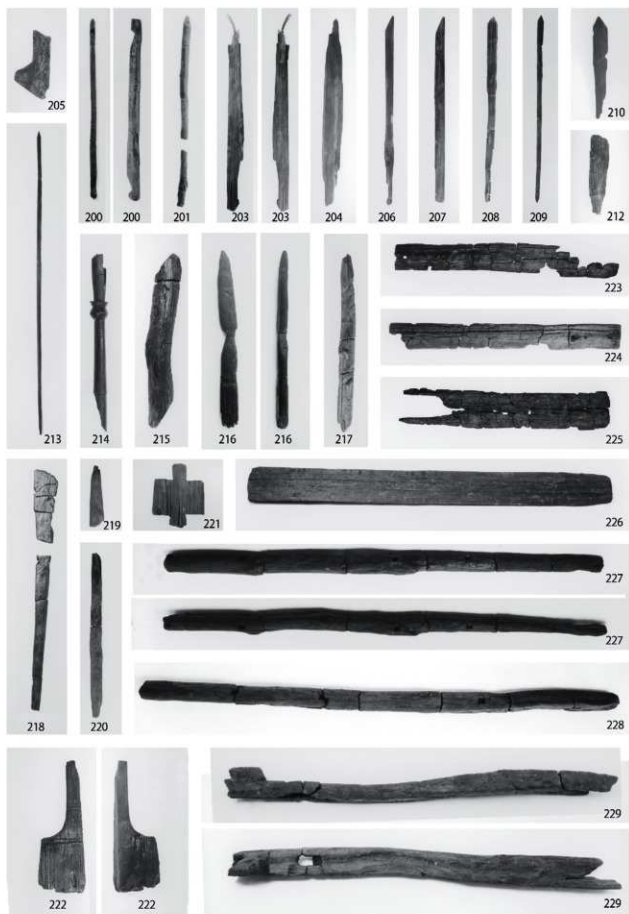


173

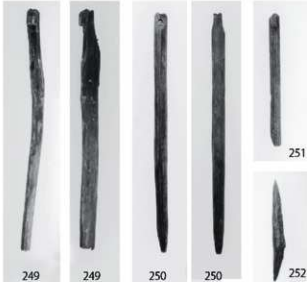
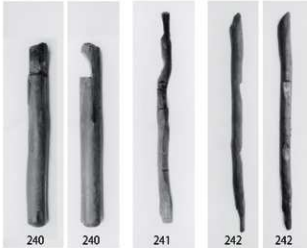
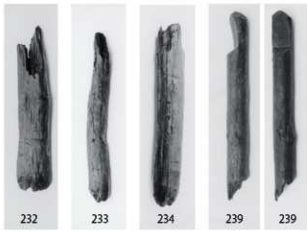
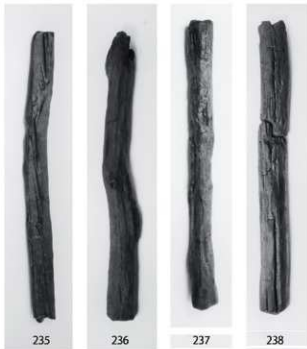
遺構写真 3 および 出土木製品 1



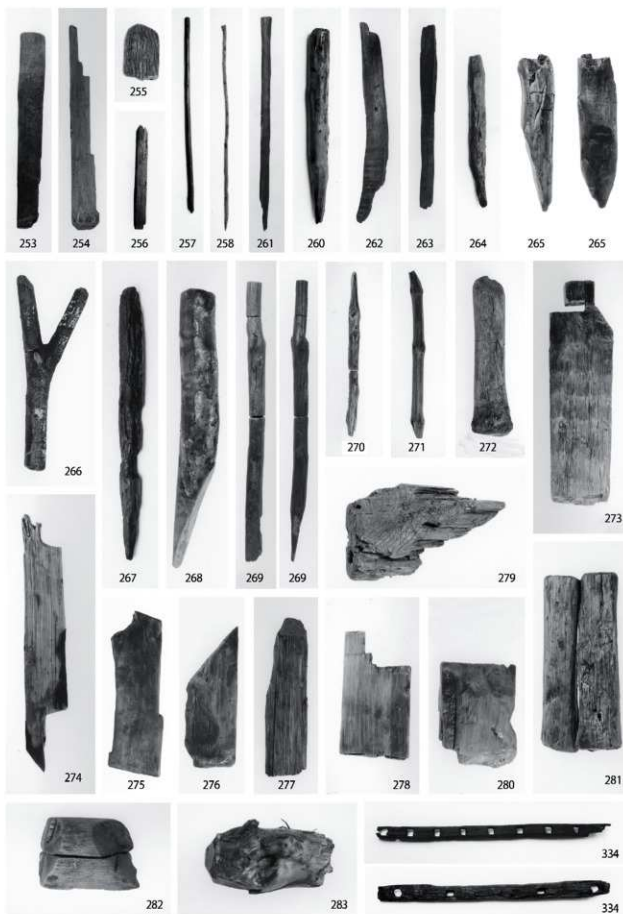
出土木製品 2



出土木製品 3



出土木製品 4



出土木製品 5

報告書抄録

ふりがな	はしがいとせき〈けんどうえーからしーちく〉はつかつちょうさほくこく						
書名	橋垣内遺跡（県道A～C地区）発掘調査報告						
副書名							
巻次							
シリーズ名	研究紀要						
シリーズ番号	18-3						
編著者名	川戸達也・紀平みどり・穂積裕昌・河北秀実						
編集機関	三重県埋蔵文化財センター						
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596-52-1732						
発行年月日	西暦 2009年3月						
所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
橋垣内遺跡	三重県津市 大里窪田町字 橋垣内・桜垣内・丸垣内	市町村 201 遺跡 番号 a 810	34° 45' 29"	136° 29' 47"	19920817～ 19930129	4,000㎡	平成4年度 主要地方道津関線道路 改良事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
橋垣内遺跡	集落跡	縄文時代 弥生～古墳時代 飛鳥時代 奈良時代 平安時代	河道 河道 掘立柱建物・溝・土坑 掘立柱建物・井戸・溝 掘立柱建物・井戸	縄文土器 弥生土器・土師器 須恵器・勾玉・白玉・ 木製品 土師器・須恵器 土師器・須恵器 陶器・青磁・白磁	儀仗形木製品		
要約	弥生～古墳時代の河道では古墳時代中期の大量の木製品が出土し、当地域の基本的な木器組成を示す遺跡となった。 飛鳥～奈良時代を中心とする掘立柱建物を検出し、当該期の周辺の遺跡も含めた集落の様子が判明した。						

橋垣内遺跡（県道A～C地区）発掘調査報告

研究紀要第18-3号

2009(平成21)年3月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター
印刷 光出版印刷株式会社

